
P 3 P + 番長

ごぶりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P3P + 番長

【NZコード】

N8553X

【作者名】

ごふりん

【あらすじ】

ペルソナ4の主人公がペルソナ3の月光館学園（中等科）に通つていたらという設定です。3の主人公はP3Pの女主人公です。基本原作どおりに進みます。

オリジナル設定もありますのでオリジナルとが嫌いという方はご注意ください。

一人の主人公紹介（前書き）

筆者のP3PのクリアとP4のアニメ化が重なったので衝動的に書いてしまいました。

二人の主人公紹介

二人の主人公設定

鳴上 悠

ペルソナ4の主人公の2年前、中学3年生で月光館学園中等科に通つている。

ペルソナの素質がありアルカナは愚者、ペルソナ3の主人公と同じでワイルドの力を持つているはずだが現状ではベルベットルームに入ることができないため一つのペルソナしか持っていない。ペルソナ4での所持ペルソナはイザナギだが初期ではその力に目覚めていない。

所持ペルソナはセイメイ（阿部清明）

有里 宙

P3Pで追加された女性主人公。特別課外活動部の中心人物。ワイルドの力を持ち複数のペルソナを操る。

物語開始当初は魔術師、恋愛、法王、戦車、皇帝、隠者のコミュニ

ティ活動をしている。

ゲームと違つて愚者のコミュニティは鳴上を相手に結ぶ。

二人の主人公紹介（後書き）

P3の主人公は姓はマンガ版、名前はオリジナルです。

P4の主人公の名前はアニメからです。

番長のペルソナがイザナギではないことに関しては一応理由があります。

5月9日

S H D E 鳴上 悠

月光館学園中等科3年に在籍する俺、鳴上悠は困っていた。

「…………」

GWも終わり世間では無気力症…俺の予想ではただの5月病が広まっているが世間のやる気のなさとは無関係に時は進んで行き中間試験まで10日を切った。少しばかり勉強を進めなくてはいけないのだが…

「俺も無気力症か、まったく勉強が進まない」

普通にGW明けのテンションで勉強が進まないだけなんだが…いくら月光館学園が初等科から高等科までありエスカレーター式で進学ができるとはいえるそれなりの点数は取っておきたい。

試験は18日（月）からで今日は9日（土）…もうすぐ日付が変わつて10日（日）約一週間ほどだ。

いや、まだ一週間あるとも考えられる。

「…気分転換にコンビニでも行くか」

本来なら深夜といつても良い時間帯に中学生が出歩くべきではないのだろう。だが幸い…といって良いのかわからないが俺の両親は今は不在。同じ会社に勤めていて現在出張中だ。

割りと出張なども多く海外に行くことも多いと聞いている。

そういうわけで俺の外出をとがめる大人は今はいない…まあ警察に捕まつて補導とかされるのも困るのでコンビニで明日の朝食と飲み物とか買って帰つてこようと思う。

「今日は満月か…」

外に出てふと空を見上げると大きな月が真円を描いている。普段月など意識をしていないのでたまに見上げて偶然満月だとなんか得した気分になるな。

「…！」

街灯が消えた？ 一つくらいなら驚くことではないかもしない…が周りの電気すべてが消えている。

停電か？

月明かりのおかげで不自由とこつわけではないが…

「停電のときってコンビニのレジって動かないよな？ 買い物出来るのか」

ちょっと不気味な雰囲気を感じながらもコンビニまではもつすぐだし…一度外に出たのにこのまま帰るのは嫌なのでそのままコンビニに向かうことにした。

ゴン！

「痛！」

考えてみれば当たり前のことが電気が動いてない＝自動ドアは開かないということもある。

うわ…恥ずかしいな…自動ドアに頭ぶつけるとか…どんなドジだよ、俺。恥ずかしくなつて思わず辺りを見渡してしまつ…知り合いいたら最悪だ…

「…え…？」

なんだ…これは…

結論から言つと俺の失敗を見ている人はいなかつた。それどころか

周りに人はいない。店の中にもだ。

そう24時間営業しているはずのコンビニの中にも人はいない。そこにはいくつかの棺桶が並んでいた。

「なんだ…これ…どうなってるんだ…」

しかもなんだか息苦しいような…圧迫感のようなものを感じる気がする。状況が理解できない。俺は事態が理解できずそのまま呆然と…しばらくの間立ち尽くしていた。

SIDE 有里 宙

「ペルソナ！」

私は自分のペルソナ、オルフェウスを呼び出して目の前の大シヤドウに火炎属性の魔法アギをぶつける。

『敵は消耗している。あと一步だ』

通信機から敵の様子を探っている美鶴先輩の声が聞こえる。

「とは言つても時間は大丈夫なんすか？」

順平はかなり焦つてゐみたいね。無理もないよね。本来は機械も止まるはずの影時間…しかし今私たちの乗つている電車のみは動いている…大型シャドウに乗つ取られているからだ。

聰い人ならこの状況がとてつもなく危険ということがわかるだろう。あえてもう一度言おう。他の電車が止まつていて中一つだけ動いている…このまま進んでいたらあと2・3分以内に何とかしないと前の車両と衝突する。

焦る気持ちは私も一緒なのだが…

「大丈夫だつて！まだ余裕あるしもう一息で倒せるんだからね」
この実行部隊のリーダーは私といふことになつてゐる。リーダーが
ここで取り乱したらそれこそ危険だと思う。先輩たちに一方的に決
められた役割とはいへなつたからにはしつかりしないとね。

「そうよ、順平。男のあんたが一番最初に弱音吐いてどうするのよ
彼女の場合は怯えていてもそれを知られたくないタイプだ。内心は
結構ビビッてるよね… つとしつかり役割も果たさないと

「ゆかり、こうなつたら回復はもう良いから全力で攻勢に出るよ」
「わかったわ。イオ！」

ゆかりのペルソナ、イオが疾風属性の魔法ガルを放つ。彼女の場合
魔力が高いから魔法攻撃が一番の攻撃手段だ。私のオルフェウスよ
り魔力高いんだよね。まあ私の場合ペルソナを付け替えることがで
きるからもしかしたら彼女より高い魔力を持つペルソナもいるかも
しれないけど…

「弱音じやねえよ！俺はきちんと状況を把握しようとしてるだけだ
つて」

「はいはい、わかったからしつかり攻撃しなさいよ
この二人の場合順平の発言にゆかりが突つ込むというのが定番とか
している気がする。

言い合つても仲良いなと感じる。

「いけ、ヘルメス！」

順平のペルソナ、ヘルメスが手に持つ剣で切りつける。順平の場合
は魔力が低く力が高い傾向にあるためこうして肉弾系の攻撃をする
のが一番効率が良い。

「あれ？たしか順平のペルソナつて鼻の長いおじさんが言つには分
類上『魔術師』のアルカナを示すつて言つてたよね？魔術師なのに
魔法より肉弾得意なんだ…私の宿す魔術師のアルカナを示すペルソ
ナのネコマタもそこまで魔法寄りつてわけではないけどね。
まあ、私たちが攻撃を仕掛ける間シャドウも黙つてやられていく
れるわけではなく…こちらに氷結攻撃を仕掛けてくる。私たちが一

体に対してもか攻撃しかけられないのに敵は私たち全員にまとめて攻撃してくるのはずるいよね。

広範囲の氷結魔法を私はなんとか避けるが順平とゆかりはまともに攻撃を受けてしまつていてる。ここで決めないと…

私はペルソナではなく手に持つた薙刀で間合いをつめて切りかかる。

「やあ！」

「一撃じや足りない…

「は！せいい！」

一撃、二撃…渾身の力をこめて薙刀を振るうと敵も弱つてきていることもあってよろける…でもまだ倒れない…？！でも隙はできた「ゆかり、順平、まだ動ける？全員でこの隙に全員でしかけるよ…」「そう言いつつ私達がまだ戦えること確信してるんでしょ。」

「おう！俺たちにまかせておけ、行くぞ」

全員で一斉に体勢を崩したシャドウに攻撃を仕掛ける、ペルソナを呼ぶ暇も惜しいとばかりにゆかりは『』で、順平は両手で持つてている大型の剣で…

『敵シャドウ消滅、よくやつたな』

美鶴先輩の声で私たちも攻撃の手を止める…間に合つたみたい…よかつた

「ギリギリ…セーフか」

順平も少し安心したかな…あれ？！

「…つてオイ！止まんねえじやねえか！」

…そうだよねえ、まだ動いてるよね

「そつか、ブレークかかんないと、すぐには…！」

あー言われてみればそのとおり、世の中には慣性つてもんが…

『おい、どうした！？前の列車はすぐそこだぞ…』

通信機からも美鶴先輩の焦つた声が…つてのんびりしてゐる場合じやないよ！

「うがー！こんなモンの運転なんてわかつかよ…！」

「私に任せて！」

「うつ見えても電車でGをむかしげーセンでやつたことがあるんだ。

「キヤアアア」

ゆかりの悲鳴をバックに運転席に飛び込みブレーキを引く

「と…止まつた？」

「止まつてゐる…みたい。」

ゆかりと順平の安堵の声が後ろから聞こえる。

『おい、怪我はないか！？』

「い、一応大丈夫です」

美鶴先輩の質問にゆかりが対応してくれてるみたいだ…

「や、やっぱ、あたしヒザ笑つてる…」

「あーつ、あーもつつ、メチャメチャ、ヤな汗かいたつーの… おい、へーキか、宙ツチ？」

二人とも気が抜けて精神的に結構着てるみたいだね

「私は全然いけるよ」

「マジ？ つたぐ、このオテンバちゃんは…」

失礼ね。 そう言いつつも結構私も怖かったのに… ブレーキの情報ソースは数年前にやつたゲーセンだし…

『フウ… 無事らしいな。 今回はバックアップが至らなかつた。 済まない… 私の力不足だ。』

美鶴先輩は責任感強いなあ… こんなこと予測できなくとも仕方ないと私は思うけどね。

『シャドウの反応はもうない、よくやつてくれた、安心して戻つてくれ』

これで作戦終了みたい。 影時間の戦闘は疲れるのよね… お腹減つたなあ

「てか、ブレーキ、よくわかつたね？」

『ゲーセンでやつたからつてちょっと言つづりいかも…』

「お、女の勘かな…・・・」

「女の勘つてそんなトコに働くかないでしょ…」

呆れた用に言われたけど……なんとか誤魔化せたかな……？

「ああ……いーや、もう、何でも。」

「うん、気にしないでいてくれたら私も嬉しい。」

「つか、帰り、なんか食つてかねえ？安心したらハラ減つちつたよ」

順平ナイス提案

「あのねー、女の子はこんな時間に食べないって……ねえ、宙」

「……『めんなさい、食べようとしてました。』

「そ、そなう、でも影時間つて体力使うから、気持ちはわかるよ」

「そうね、コンビニくらいなら寄つてもいいかも」

「つてかよく考えたら影時間終わるまで待つてなくちゃコンビニ寄つても意味なくね？」

あれから私たちは影時間の中3人でコンビニに向かっている。桐条先輩も誘つたけど来なかつた。

「良いじやん、どうせもうすぐ影時間も終わるし、少し待つだけだつて……つてあれ？」

「どうしたんだ？ゆかりッチ」

「あれ、コンビニの前に人が立つてない？」

確かにゆかりの言つとおり。コンビニの前に呆然と立つている少年がいる。

「へ？別に不思議じやないだろ？コンビニの前に人がいたつて……

「……え！？」

順平もようやくこの状況に気付いたみたいだ。今は影時間普通の人間は『象徴化』という現象にあい棺桶の中で眠つているはずだ。

「ゆかり、桐条先輩に連絡とつて、私はあの子のところに行つてみる。順平も付いてきて」

「うん、わかつた」

「お、おひ

SIDE 鳴上 悠

「ねえ、君、大丈夫？」

どのくらいの時間そこで呆然としていただろ？…気が付くと目の前にポニー・テールをした俺より少し年上…高校生くらいだろ？…かなりの美少女とついでに帽子を被った男の人に話しかけられた。

「あ…す、すいません、大丈夫です。それよりなんかおかしくないですか？」

答えつつ辺りを見渡すと状況はまったく変わってない。相変わらず棺桶は見えるし電気も一切ついていない。

「大丈夫、もうすぐ影時間も終わるし」

「影時間…？」

聞きなれない単語が出てきている。この人はこの怪現象のことを何か知っているんだろうか…俺が疑問に思いたずねようとしたところ不意に周りに明かりが付いていく。それに棺桶があつたところに何事もなかつたかのように人が立っている。

「え…なにが起こっているんですか？」

「えーと…詳しい説明をしてあげたいけど…ちょっと待ってね、とりあえず先に買い物済ませちゃわない？君も何か買い物に来たんでしょ？」

「で、ゆかり、桐条先輩はなんて？」

私達は合流したゆかりも含めて少年が会計中に軽く相談する。

「うん、詳しい説明は後口に回したほうがいいって…『素質』がある可能性があるから連絡先とかは聞きだしておく用に言われたけど」「あーそうだな、時間も時間だし…初めての影時間でまだ混乱してるだろうし」

そう言えればペルソナ使いでも影時間に慣れないうちは記憶の混乱とか起こりやすいんだつけ…自分が平気だったからすっかり忘れてた。「でもさ。この怪しい状況で連絡先聞いてさよならつて私たちのほうが怪しい人じやない？」

「大丈夫だつて、宙ならできるわよ。宙つてなんか話しやすい雰囲気とかあるし」

「あーなんとなくわかる気がする。宙ツチツてなーんか話しやすいんだよな」

二人とも無責任なことを言う…確かに割りと人見知りしないタイプだけどさ…確かに順平の軽いノリやゆかりのデフォルトのツン状態と比べたら私のほうが上手くできそなんだよね…仕方ないなあ…

明日の朝食とか気分転換用の飲み物とかそんな気分じゃなかつたけど少女に押されるようにして買い物を終えた…そして向こうにはもう一人美少女が追加されていた。

ああ、そう言えばこんな非常事態で名乗つてなかつた。

「えつと鳴上悠です。」

「私は有里宙、宙で良いよ、私も悠くんつて呼ぶね」

「はい、それでいつたいあればなんだつたんですか？」

「きちんと説明してあげても良いけど…悠君大丈夫なの？普通に部屋着でちよつと外に出て買い物に来たつて格好だけど…めんどくせくて近くのコンビ二に行くときの服装にこだわらないのは俺だけじゃないはずだ。」

「だからさ、日を改めて詳しいことを説明するつてことじやだめかな？」

美少女が上目使いで言うのは反則だと俺的には思つ。まあ見た感じ悪い人には見えない。状況的に見て怪しい気もするがこのまま放置するつて言うのも気味が悪い…結局その日俺は宙さんと連絡先を交換して家に帰ることにした。

…これが俺の人生を大きく変えることにそのときは気が付いていなかつた…

5月9日（後書き）

おまけ

5月某日

噴水に大量の500円玉を滝のように入れている女性がいる。

- ・声を掛ける
- ・そつとじておじつ

・そつとじておじつ

予定と違つて悠君の出番が少なかつたです。

メインになるのは次回からつてことで…会話が原作とほとんど変えずに行開していったP3サイドが思つたより長引いてしまいました。駄文ですが読んでくださつた方ありがとうございました。感想をいただけると大変嬉しいです。

5月10日

SIDE 有里 宙

昨日の夜作戦後に予期せざる事態に遭遇したせいでそのままミーティングに突入した。

正直…今日が日曜日でよかつたと思う。ただでさえ影時間で活動した次の日は疲労しているのにその後にミーティングで寝不足は辛いものがある。

昨日決まったこととしては説明は幾月さんがするってこと。そして昨日の顔合わせた私も同席しないといけないってこと。

今日は古本屋に遊びに行こうと思つてたのにな…今日は外出控えたほうがよさそうだし…

とりあえず彼に連絡しないといけない。

SIDE 鳴上 悠

朝、昨日のは夢だったんじゃないかといつ希望的観測を持ちつつ日を覚ました俺だったがこれが現実と詰つことをすぐに思い知らされることになる。

携帯をみれば交換したアドレスが登録されていたのですぐに気付いたのだろうが無意識のうちに避けていたのかもしれない。

もちろん向こうから電話が掛かってくれば避けようがない現実と言ふことがわかるわけだけど…

昼過ぎに昨日の女性、宙さんから電話が掛かってきた。今日の夕方に時間があれば会って話したいと言つことだつた。驚いたのが向こうが指摘してきた場所が巖戸台分寮… 月高の寮と言つことだ。

怖くはあつた。昨日のは明らかに異常事態だつたし… でも知らないままでいることも怖いし…

本来なら昼間は勉強して過ごすべきだつたんだろうけど… この状態で勉強しても手に付かないだろつと思ったのでこの前リーコーアルをした古本屋に寄つて少し時間を潰し巖戸台分寮に向かつことにした。

寮に入ると結構意外に思つた。入つてすぐに学生寮とは思えないようなラウンジがある。

そこに昨日会つた宙さんと昨日はいなかつた美人という言葉が似合う女性、そしておつさんの3人が待つていた。

「やあ、待つっていたよ、僕は幾月修治、一応君も通つている月光館学園の理事長をしている者だよ」

「私は桐条美鶴、よろしく頼む」

…は？理事長？それに桐条つてまさかあの桐条なのか？… つて呆けてる場合じやない、俺も挨拶しないと…

「鳴上悠です。あの… 昨日の妙な現象を教えてくれると聞いてきたんですけど…」

「うん、その話なんだけどね、実は一日が24時間じゃないって言われる君は信じるかい？」

何を言つてんだ、このおつさん… 実は理事長つて言つのも妄想とか？

「信じられなくて当然だと思うが君はもうそれを体験しているんだ」

「それが昨夜のことってことか

「なかなか頭の回転がいいようだな。そうだ、君が昨日体験したこと、あわれが普通とは違う時間だ。

あれば影時間一日と一日の狭間にある隠された時間だ」

桐条さんが説明を引き継ぐように話し出す。たしかに、昨日家に帰つて時計を見て驚いた。かなりの長時間呆けていたはずなのに時間はぜんぜん過ぎていなかつたし…

「つまり俺は普通の人が体験できない時間を過ごしていったってことですか？」

「うわ、理解力あるね、君。私初めて聞いたときはまったく理解できなかつたよ」

「影時間は毎晩必ずやつてくる。今夜もこの先もずっと。ただし普通の人は認識できない棺桶に入つて眠つていてるからだ。」

「それで何で俺がその時間に動けるのでしょうか？」

「その件についてはひとまず置いておくとして影時間の説明を続けさせてもらおう。君は幸運にも昨日は会わなかつたようだが影時間の間には化け物が出る。私達はそれをシャドウと呼んでいる」

「化け物つて……なんか話がやばい方向に

「シャドウは影時間にのみ現れてそこにいる生身のものを襲つ、シャドウに襲われたものは氣力を失い…君も知つてはいるだろう。世間で無氣力症と呼ばれるものたち、あわれがシャドウに襲われた人たちだ。

」

「重度の5月病だと思つていました…

「つてそれはつまり俺が襲われる可能性があるつて事ですか！？」

「そう、車道に出たら危ないようになにシャドウは危ないんだよ

時が止まつた

「…だから放置していたら危険なので私たちがシャドウと戦つてい

るわけだ」

あ、桐条さんなかつたことにした。

「え？ 危険なんですよね？」

「俺も寒い空氣でいらるのは嫌なのでそれに乗つかることにした。

「影時間の中で自然に適応できる人間は『ペルソナ』と言われる力を使える可能性がある」

「つまり俺にもそのペルソナ…ですか、それが使える可能性があるってことですか？」

「そういうことだ。シャドウはペルソナ使いしか倒せない。だから私達が戦っているんだ」

俺と桐条さんが話を進める中さつきの寒い大人が少し寂しそうな顔をしているが放置…

「そして君がもし、ペルソナ使えるのなら我々に力を貸して欲しい。」

「え！？ 桐条先輩、彼はまだ中学生ですよ」

「…なんで知ってるんだろう…って理事長と『桐条』がいれば俺の素性を調べることなんて簡単か

「私達が活動を始めたのは中学のころだ。彼にその意思があるなら問題ないだろう。」

シャドウにペルソナか…

このことが真実ならたしかに非常事態だと思つ…だけど『戦い』俺にそんなことができるのか…

「少し… 考えさせてもらえませんか？」

「そうだね、まだペルソナを使う適正があるかはわからないし、それにもうすぐ中間試験だ。テスト前にバタバタして結果が散々でしあつてことになつたら本末転倒だしね」

あ… 寒い大人が復活した… 一応こんなのも理事長なんだな。テストのことを気遣うとは

「ああ、学生の本分は勉強だ。とりあえず結論は急がずに君はテストに集中すると良い」

そういうえばこの人がある『桐条』さんだつたら噂によると生徒会長やつてるんだよな…

「えーと今更な質問ですが桐条先輩つて言つたら高等科の生徒会長をしていらっしゃる方ですよね?」

「ほう、中等科の子も知つているのか」

それはそうだらう…多国籍企業である桐条グループを知らない人はこの町にはいない。俺のような学生たちが普段遊ぶ『ポロニアンモール』という名前、ポロニアンは桐という意味で桐条から貰つてゐるくらいだし…

「では中間試験終了までに考えておいてくれ。そのときにまた話そう」

そう俺は声をかけられその場は解散となつた。

…影時間、ペルソナ、シャドウ色々な情報を頭の中で整理しつつ俺は家へと向かつていた。

「ちょっと待つて、鳴上君」

さつきはほとんど発言をしていなかつた畠さんが声を掛けてくる。

「どうしました?」

「さつきの美鶴先輩の言つてたことだけね。無理だと思つたら断つていいからね。えーと…君の事色々調べたみたいで私も君のこと事前に教えてもらつたけど…君の御両親、桐条グループに勤めてるんでしょ?」

まあ、調べたのなら当然その情報はあるよな…

「美鶴先輩は断つたからつてそれを理由に何かするような人じゃないから。というよりそれを理由に何かするよつなら私が黙つてないからね」

たしかにそれも断りづらいう理由ではあつたが…わざわざ追いかけて

きて語ってくれるなんて親切だな…

「畠さんはなんで戦つてるんですか？」

「そこが気になつた… 畠さんだけではない。昨日会つたほかの一人、名前は知らないけどあの一人も彼女も俺のようになつて一般人のよつに見える。普通の学生が戦つのは怖くないのか…？」

SIDE 有里 畠

「畠さんはなんで戦つてるんですか？」

私は美鶴さんや理事長がこれから強引に話進めるんじやないかと思つて一応心配して追いかけてきてみたら逆にそう問われた。

「なんで戦うか…か」

私の場合は選択の余地なかつたからなあ… 最初の実戦は巻き込まれたようなもんだし… そこでいきなり大型のシャドウ吹き飛ばしちやつたみたいで先輩たちの勧誘の熱心さは彼の比じやなかつたし…まあ、それでも決めた最大の理由は

「知つて放置できなかつたからかな。」

「え？」

「私の場合ね。今年の4月転入してきて、寮に入つてすぐに戦いに巻き込まれて… シャドウのことも知つて… その戦いに私の友達も関わつていると知つた。」

「友達…ですか？」

「そう、君も昨日会つた子、岳羽ゆかり、そのとき一緒にいたんだけどシャドウとかのことは知つて彼女も戦いに参加しようつとはしてたんだけど…」

おそらく…って言うより間違いなく最初からゆかり本人はともかく先輩たちには私にペルソナの素質があるのを知つて接觸させたんだろうけど

「ペルソナの召喚方法ってのは特殊でね…銃で自分の頭を撃たないといけないんだ。それができなくてそれでも必死にやる「つとして…銃を落とされて私に逃げるよう声を掛けてたつけな…」

「私が転入してきて最初の友達のゆかりがそこまで必死に戦う理由があるなら私も居力してもいいかなーっての言うのがきつかけ」あつて3日程度の…ペルソナを使って一週間ほど倒れていた私に付いててくれたわけだし

「そう決断した。自分で決断したことには責任を持つ。」

そう『契約』したし

「それに誰かがやらなくてはいけないことをなんだし、私は人任せにするのは嫌いなんだ。」

順平みたいにヒーローになりたいとかではない。ゆかりみたいに何か目的があるわけでもない。

それでも私はこの決断でよかつたと思う。この町に来てたつた一ヶ月ほどでだけど自分の周りに多くの人がいて『『ハリコニティ』を築き始めているから

「だからと言って無理をする必要はないよ、君自身のことは君が決めることだからね。」

「だからと言つて無理をする必要はないよ、君自身のことは君が決めることだからね。」

彼女の瞳には強い意思が見えた。

「参考になりました。ありがとうございます。」

その場は礼を言つて辞することにした。

期限はまだある。だが俺の中ではもうすでに結論は出ていたのかも

しれない。

年上と言つても俺の一つか二つ上だろう、そのくらいの年の少女が戦っているのに男の俺が逃げるわけにはいかないという見栄なのがもしけない。理由は俺自身にもはつきりわからないが俺は自分に戦う力があるなら…そう考えていた。

S H D E 有里 宙

「それで、話つてどうなつてたの？」

夜、2Fの談話スペースで私たち2年生組、私とゆかりと順平の3人が集まって今日のことを話していた。1Fでは真田先輩と美鶴先輩が同じ話題をしてるだろう。同じ話題なら一緒に離せば良いと思うが…ゆかりはどうも美鶴先輩が苦手みたいだからなあ…

「説明と…勧誘かな」

私は今日あつた事の内容を一人に伝える。

「おっ、良いじゃん、後輩ができるってことだら」

順平は単純に乗り気、意外と面倒見の良いところあるからなあ。年下の後輩ができるのが嬉しいのかもしない。

「普通の中学生を巻き込んで良いのかなあと思つたけど……桐条先輩強引なところあるし……」

ゆかりは私と同じこと心配してゐるみたい、私が勧誘されているときも彼女だけは無理に引き入れようとしなかつたし……

「それは大丈夫だと思うよ。しっかりと話しておいたし。それに中学3年ならそこまで子供じゃないでしょ、自分でしっかり決断すると思つよ」

「そうね、昨日見たところ順平よりしつかりしてそuddash;」

「ちよつ、そこでなんで俺を出すんだよ」

「とりあえず結論が出るのは中間テスト終了後、順平はいきなり後輩に無様な姿見せないよう勉強する必要あるんじやない?」

「亩ツチまできつい突つ込みをー?あーあ、テストってなんであるんだろうな。昨日大型のシャドウと戦ったのに気が休まらないってどういふことだよ」

「そう、結論が出るのは先のこと……私達に新たな戦力が加わるのかどうか……」

5月10日（後書き）

今回は説明回です。

初回と二回連続で投稿できましたがここからは少し更新頻度も遅くなります。

あと重要イベントがない日の話はもっと短くしたいですね。だらだらと長すぎるような気がしますし。

それでは読んでいただきありがとうございます。観想いただけるとうれしいです。

5月23日～24日（前書き）

テスト期間終了まで時間飛びます

SIDE 鳴上 悠

中間テストも無事終了した。

俺はすでに参加も決意していたおかげでテスト勉強に集中することもできた。結果は期待できるだろう。

テストが終了し約束通り俺の結論を話すために理事長と会うことになった。

そして俺は参加することを理事長に話した。そこからの展開が早かつた…

シャドウとの戦いのための特別課外活動部、そこに入ると寮暮らしをすることになるらしい。

とは言つても実家がすぐ近くにある俺は寮に入る理由はない。しかも入る場所は高等科の寮である。中等科の俺が入るのは不自然すぎるだろう。

どうするものか… どう心配したのも杞憂であった。理事長はすでに手を回していくらしくその日のうちに俺の両親に会い説得してしまった。

寒いだけの大人かと思つたら意外と使える。

桐条グループにも手を回していくらしく親父達に長期出張の話も出ているらしいし… 俺は権力と言つもの恐ろしさをこの年で学んだようだ

(知識が高まった)

なんか音が鳴つて音符が飛んだような気がした。

テスト終了が土曜日、次の日が休日なのが幸いだった。

土曜のうちに荷物をまとめて日曜日に運ぶことになった。

「おう、来たか、荷物運ぶの手伝おう。」

そこで初めて顔を合わした男の人とこの前もあつた帽子の人が荷物を運ぶのを申し出してくれる。

「ありがとうございます。今日からこの寮に入る鳴上悠です。」

「ああ、俺は真田明彦だ、よろしくな。」

つて真田明彦！？あのボクシング部の！？俺でも知っている名前だ。無敗のボクシング部のヒーローだ。中等科まで噂が響いてくる。

「俺は伊織順平、順平でいいぜ。」

「真田さんに順平さんですか、よろしくお願いします。」

宙さんに岳羽さん、桐条さん、真田さんとやたらともひそつな中に順平さんがいるとほつとする気もした。

「お前何か失礼なこと考えてねえ？」

「そんなことないですよ。」

「話してないでさつさと運んでしまおう。」

実家が近いこともあり大した荷物量ではない。男3人でやるとわりとあつさり終わった。

荷物を運び終えた後この寮にすんでいる女性陣も帰った来た。昨日のうちに俺の加入は伝えられていたらしい。

「私は岳羽ゆかり、宙から話は聞いてる？よろしくね」

「改めて名乗ろう。桐条美鶴だ。特別課外活動部の部長だ」

そうやつて自己紹介している間に一一番遅くまで外出していた畠さんも帰ってきた。

「ただいまー」

「おかげり、畠、今日は鳴上君も来る早めに帰る用に言われてたでしょ」

「いやー、『めん』『めん』、映画館でバイトが終わつた後こいつそり上映中の見てたら止まらなくつて」

それは良いんだろつか…

「というわけで改めてよろしくね、鳴上君」

3年で部長の桐条美鶴さん、同じく3年真田明彦さん、2年で作戦時のリーダーの有里畠さん、同じく2年岳羽ゆかりさん。2年伊織順平さん、そして俺、中等科3年の鳴上悠。これが現在の特別課外活動部通称SEES (S p e c i a l E x t r a c u r r i c u l a r E x e c u t e S e c t o r) のメンバーらしい。あ…ついでにいづと顧問は寒い大人こと理事長の幾月さんだ。

「それでどうする？新メンバーが入つたしさつそく今夜タルタロスに行くか？」

タルタロス？真田さんの言葉に俺は疑問符を浮かべる。

「お？見たことないのか？見たらびびるぜ。」

「確かに順平は始めてみたときすぐ取り乱していたし。」

「タルタロスとはシャドウの素だ。そこに影時間とシャドウの謎が隠されていると思われる。なので我々が探索を進めていく。」

順平さんとゆかりさんでは説明が進まないと思つたのか桐条さんが教えてくれる。

「で、どうする？リーダー」

探索のことも畠さん任せなのか、リーダーとして信頼されてるんだな。

「うーん…タルタロスには向かいましょ。でもその前に準備は必

要だと思います。鳴上君、ちょっと付いてきてくれる?」「準備つてなんですか?」

「いいからいいから……」

宙さんに連れられ夜のポロニアンドモールに連れて来られた。

「ここにで買い物ですか?」

確かにシャドウとやらと戦つなら青髭の薬とかはあつたほうが良い。

「うん、そう、武器買わないとね」

は…?ゲームじゃあるまいし武器屋なんてこの町にはないと想つた
だが…疑問に思つ俺を連れて行つたのはなんと警察だった。

「おひ、よく来たな、新しいものも仕入れたぞ」

本当に武器や防具が売つていた…

話を聞くとこの警察官、黒沢さんはこの町の異変を感じ取つて
らしくそれを解決する力を持つ俺たちに力を貸してくれているらし
い。

「お金は取るんですね?」

「この世に無料のものなんてない」

「無料より高いものはないって言つしな」

「それで、鳴上君はどんな武器が良い?」

片手で使える剣、両手で使える剣、グローブ、薙刀、弓、斧、槍、
突剣様々な武器が並んでいる。

俺は両手で使える剣タイプを選ぶことにした。このスタイルが俺に

一番合つ、順平さんも武器を使うらしいが。

あとは防具のほうも揃えて俺たちは寮に戻ることにした。

宙さんは少しゲーセンに寄りたそうにしていたが今日はタルタロス
に行くからと自重したようだ。

そして深夜12時…その時間前俺達は月光館学園高等科の前にいた。

おまけ

- ・「私は岳羽ゆかり、よろしくね」
- ・「よろしくお願いします」
- ・「よろしく、ゆかりッチ！」
- ・「よろしく、ゆかりッチ！」

その発言をするには勇気が足りない

次回タルタロスです。

鳴上の武器はキタロー・ポジションの小剣にしようかとも思つたんですけど4の原作どおり両手剣です。ゆかりは原作やつていると男主人公や順平には結構きついけど年下にはわりと優しい印象が筆者にはあります。

順平も主人公には嫉妬しますけど鳴上の立場になら優しい先輩になります。

皆さんはどう感じられるでしょうね？

では読んでくださいありがとうございました。感想をいただけたと励みになります。

SIDE 鳴上 悠

非常識な事態にはここ一週間で慣れていったつもりだったがこれには驚いた。

ありのまま起こったことを話す。

影時間になったとき学校が大きな塔に変化した。

何を言つてゐのかわからぬと思つ。

俺も一瞬何が起こったのかわからなかつた。

超スピードとか超能力ぢやない、もつと恐ろしいものの片鱗を味わつた…

…とまあお約束のボケはさておき本来学校があつたはずの場所に大きな建築物が現れたと言つことだ。

「驚いたか？これがタルタロスだ。」

「私たちも先月からこここの探索を始めたばかりだからまだ何もわかつてはいなけれどね。あからさまに何かありますつて雰囲気でしょ？」

真田さんと宙さんの説明に俺は頷くしかない。

ともあれ俺にとつては初実戦：緊張はする、だがそれとは別に高揚感を感じながら俺はタルタロスに足を踏み入れた。

私はいつも通りを装いつつも鳴上君のことが気になっていた。

私は他の人のアルカナがわかる。アルカナとはペルソナの性質を示している。

鳴上君のアルカナは愚者…私と同じワイルドの力を宿していると思われる。

彼なら私以外の人間には見えない扉…ベルベットルームが見えるのかもしれない。

彼に複数のペルソナを扱う力があればかなり心強い。

この事件に関わってから私にしか姿を見せない謎の少年、私にしか

見えないベルベットルーム。

これらのことばは他の人には話していない。相談できる存在になり得るのではないか。そういう期待感がある。

私はベルベットルームのほうに歩を進めた。

SIDE 鳴上 悠

宙さんが何もない方向に足を進めて足を止めた。

「何をやつてるんですか？」

「ああ、気にしないほうが良いわよ。宙はよくああやつてあの位置でボーッとしてるの」

俺の問いにゆかりさんが答える。

「でも宙ヅチがあの行動取つた後つて宙ヅチのペルソナ強いのにな
るんだよな。」

「強いのになる?」

順平さんの発言に俺は疑問に思つ。ペルソナは一人一体じゃないの
か?

「ああ、彼女の場合は別だ。一人で複数のペルソナを使いこなすこ
とができる。状況に応じてペルソナを使い分けどんな状況にも対応
できる。私が彼女にリーダーを任せ頼りにする理由の一つだな。」

桐条さんが俺の疑問に答えてくれる。

こうなつたら少しの時間待つているのが普通のことのようだ。順平
さんたちは雑談を始めていた。

俺は何故か気になつてそこで立ち止まる宙さんのほうを見ていた。
…? なんだ俺の気のせいか、一瞬何か青い…扉か? 見えたよつた氣
がしたが一瞬のことなのではつきりとは言えない。

「うん、それじゃあ出発しようか。」

考えていたうちに宙さんがじきにひきつけてきていた。
いよいよ実戦か。俺はこれから始まる戦いに頭を切り替えること
した。

見えないか…私はベルベットルームに入つて後ろから聞こえる会話
を聞きながら考えていた。

「よつこせ、ベルベットルームへ」

すでに顔なじみになつた鼻長おじさん」とイゴールさん、私に色々と依頼をしてくる美人さんエリザベスさんに迎えられる。

「ほう、これはまた興味深い方がお仲間になつたようですね」

「イゴールさん、なにかわかつてゐるの?」

「本来交わることのない運命が重なり合つたとき、物語はどのよう

な道筋を辿るのか。」

相変わらずわからづらう言い回しのおっさんである…

「結局どういうことなの? 鳴上君は私と同じような力持つてゐるんだよね? 何で彼はここには入れないの?」

「彼は本来ならまだ力を目覚める運命ではなかつたのでしき。いずれここのお客人になりえるかもしれませんが今はまだそのときではありません。」

わけがわからないし…このおっさん色々知つて事件の黒幕なんじやないかと思うときすらある。

「ここでは時も空間も意味をなさぬもの。私とて全てを理解していわるわけではありません、ただここに訪れる方々に運命に立ち向かうための力添えをするのが使命でござります。」

…まあ、実際にペルソナの合体とか助かるのは事実だし…しかしこの言い回しだと鳴上君、他の事件にも巻き込まれる運命?

……………強く生きるんだよ、少年

気のせいか宙さんの視線に同情のよくなものを感じる…

「それじゃ、今日は鳴上君のデビュー戦だし軽く行こうか」

「おいおい、確かに今日は鳴上のデビューもあるが俺の復帰戦も兼ねているんだぞ。」

真田さんはあばらをシャドウにやられて戦線を離れていたらし。

たまたま真田さんの復帰と俺のデビューが重なつたらし。

「鳴上、ちゃんとペルソナ呼べるか？まずは俺ツチが手本見せてやるから同じようにやれよ。」

「順平だつてまだペルソナ呼べるようになつて一ヶ月くらいでしょ、あんたの場合先輩ぶりだけでしょ。」

今年度に入つて課外活動部のペルソナ使いの数はいっさに増えたらし。

年単位で戦い続けているのは桐条さんと真田さん、そのうち桐条さんは今はバックアップとしてエントランスから指示をする立場（桐条さんのペルソナ能力には後方支援の能力があるらしい）真田さんは怪我から復帰したばかり。それを踏まえても戦闘暦一ヶ月の宙さんは現場リーダーと言つのはすこいと思つ。

「ほら、いつまでも話してないで行くよ。」

宙さんに率いられて俺達はシャドウのいる領域に入つていた。

タルタロスはエレベーターはない。正確に言つなれば階層をいつきに移動する装置はあるがそれはこじらで手動でスイッチを入れなければそこの階層にはいけない。

つまりはこの軽く100階は超えてそつた塔を自力で登らなくてはいけない。

それでも階段を登るだけならまだ良い。毎回構造の変わる迷宮を進んでいかなくてはいけないのだ。

俺が今いるところは16階、第1階の最上階らしい。

前は通れなかつたらしいが満月の夜（俺が影時間い気付いた日だ）に大型シャドウを倒してから通れる用になつたらしい。

つまり先輩たちにとつても未探索ゾーン…やばいな、どんどん緊張してきた。

階段を登り、少し歩くと目の前にシャドウ…初実戦だ。

「先輩、分析お願ひします。」

『了解、少し時間をくれ』

宙さんの指示で桐条さんが敵の能力を分析する、シャドウとの戦いにおいて敵の弱点を知ることは重要らしい。弱点を突いて敵がひるんだところを攻撃が定石という。

もちろん分析中俺たちもボーッとしてるわけにも行かない。戦いが始まつた。

相手はマントとフードを付けて空中に浮いてる…なるほど、確かに物理法則とか無視した化け物だ…

「ペルソナあ」

順平さんの召喚した『ヘルメス』が敵に突っ込む、岳羽さんの『イオ』が疾風を放つ、真田さんの『ポリテューカス』が電撃を放つ。それを見ながらも俺は…なかなかペルソナを呼び出せずにいた…銃を自分の頭に向けて引き金を引く、それだけなのに躊躇つてしまつ。そしてシャドウが虚ろな双眸で俺を見る…

「ム…ド」

シャドウの口がそう動いたように見えた。

『いかん！呪殺魔法だ！あれを食らつたら…』

魔法陣のようなものが出て俺を包み込むように展開する。

「…鳴上（君）…」

ヤバイ…俺はここで何もできずに死ぬのか…

（我是汝）

な、なんだ…

（汝は我）

展開されていつた魔方陣が俺に触ると効力を失ない消滅する。そして……

「ペ

俺の中から

「ル

弾けるような感覚と

「ソ

力を感じる

「ナ

俺は震える指で…引き金を引く

（我は陰陽を司りし陰陽師…阿部清明なり）

これが…ペルソナ…俺の力か…

俺は心の声に従いペルソナの力を解放する…

「スクカジャ」

「…へ？」

順平さんの声も聞こえるが無視

「畠さん、ペルソナエンジニアの弱点を

俺は今取れる最善の手段を、攻撃手の命中率を上げる

「え、ああ、わかった、美鶴先輩、分析結果は？」

「あ、ああ、光属性だ」

「エンジエル！」

美鶴先輩の分析結果を聞き畠さんがハマの魔法を放つ…光に弱い敵シャドウは一撃で消滅する。

「おいおい、今はないだろ、ああやつて格好付けて召喚するからには攻撃するだろ！。フツー！」

シャドウを殲滅した後に順平さんに先ほどの戦いに関して突っ込ま

れる。

「ああ、えーと、それなんですが…」

「言い辛い…が戦闘に関することだ、黙つてているわけにはいかない。

「俺のペルソナ…攻撃手段持つてないみたいで…」

…どうやら俺のペルソナは今のところ回復の術と味方を強化する術を使えるらしい。今後どのように成長していくかは分からないうが今のところ味方をサポートすることしかできない。

「補助特化タイプのペルソナか。うん、そういうタイプが一人いると心強いよ。」

宙さんはそうは言ってくれるが…攻撃は自分の持つ剣で何とかしないといけないって言つのは案外気が重い…

その後しばらくタルタロスを調査して今日のところは帰ることにした。

こつして俺のタルタロスデビューは終わった…
影時間はなんとか召喚はできたものの自分一人では戦いが大変という事実…しかも日曜の夜にすごく疲れた…（なんでも影時間は通常より疲れ易いらしい）。

これから先大変そうだ…

鳴上のペルソナ、セイメイに関して
相性 光 無効 閻 無効

スキル

ディア メディア パトラ スクカジヤ
習得予定 タルカジヤ

P3で仲間で存在しないタイプとするとまずは万能系、P4の直斗ポジションが頭に浮かびました。

でも筆者の視点で言うとSP効率が悪くて弱点も付けない万能魔法キャラはそれだけでは使いづらいのです、しかも序盤からメギドとかありえないし…

ということでの作中ではP3時代の鳴上君は回復、強化系、万能系と成長させる予定です。

筆者的にはこのキャラは雑魚戦では他のキャラに劣るけどボス戦ではレギュラーになりそうなタイプだと思います。

相性は光闇無効の弱点がないというのは高性能ですね。

話題が変わりますがペルソナ召喚、ゲーム内ではオープニングでゆかりがすごく躊躇っているのに本編が始まるとあっさり呼ぶし、順平も平然と使いこなすしで違和感感じたんですね。一度できればあとは普通にできる用になりそうなのですが…

後から追加で仲間になるあの子はテンポ重視でいちいち躊躇わないので戦うでOKなんですね。

まあ、男の子は銃はおもちゃとして慣れている面もあるかもしれませんけどね。

ではここまで読んでいただきありがとうございました。

感想をいただけるどうれしいです。

次回はミニコ編（予定）

番外編 愚者？（前書き）

たまに番外編として「ミコニティ編」を入れます。

『「ヨリヨリ」他者との絆が私のペルソナの力になる。

つまり人と仲良くなればなるほど私のペルソナは強くなるらしい。

…こう書くとまるで私が打算で人と付き合つててののかと言われそうな気がする…

勿論ペルソナが強くなることは嬉しい。だが人付き合いつて言うのはそれだけのものではない。

元々私は他者と仲良くなることが得意だ。

だからと言つて特定の友達とずっと一緒にいるつてわけではない。

『広く、深く』

…やっぱり客観的に見たらペルソナのためつて思われそうだなあ…まあ、このことを知つてているのはイゴールさんとエリザベスさんだけ、とはいえる自分で打算的に自分が見える…

まあ、私には色々な面があるつて言うのは『ペルソナ』が証明してくれるわけか…

そういう理由もあり私は部活に参加しつつも友達付き合つもあり、委員会もあり、生徒会も手伝いつつたまにバイトもするという多忙な生活を送つていて。

開いている日もゆかりや順平のような友人に誘われることも多い。しかし今日は珍しく何も用事がない日。こういうときは私は町を色々歩き回ることが多い。

ということで今日は商店街を歩き回つていた。

そして見覚えのある人影が見えたので声をかける事にする。

「おーい、鳴上くーん。」

SIDE 鳴上 悠

学校も終わり放課後、今日は部活もないし他の友人ととの予定も入っていない。こういう日は趣味に当てるに限る。ということで俺は趣味の釣りをすることにした。

俺が住んでいるポートアイランドは人工島、つまりすぐそこに海があるということだ。

釣具を取ってきて商店街で魚の餌を購入、さて釣りに行こうというところで知り合いに会った。

「おーい、鳴上くーん。」

「宙さん? どうかしましたか?」

「たまたま鳴上君を見かけてね、その格好は…釣り?」

まあ、俺の格好見ればわかるよな。

「うーん…面白そだだから私も付いていって良い?」

正直釣りは根気が必要な趣味だ。魚が掛かるまでのんびり待てるような人でなければ退屈するだけ、俺はそのことを告げてみたが、

「一人より二人のほうが退屈しないでしょ?」

と言われて結局二人で釣りに向かうことにした。

私は糸を垂れる鳴上君と一人でのんびりとした時間を過ごしていた。
これはせっかくだから交流する良い機会だよね。

「鳴上君ってさ。釣りが趣味なの？」

「ええ、まあ正確に言うと趣味の一つってところですけど。」

「一つって事は他にも？」

「部活も本気で大会に出たって言うよりは趣味で遊ぶ集まりって
感じですし。必ず出ないといけないって部ではないですしね。」

その辺は私も同じだ。私も所属はするけどそれだけに縛られるのは
嫌だしね。

そこでしばらく話していると彼が驚くほど多趣味の人間と言つこと
が分かつた。

部活動のバスケ、吹奏楽、その他にも乱読家で本があれば適当に何
でも読むらしい（釣り用の暇つぶしらしい『漢』シリーズと言うの
を持っていた）。そして今やっている釣り、一時期はプラモ作りに
もはまつたと言つし…聞けば料理もするらしい（これは趣味と言つ
より出張の多い家庭のために身についたスキルというが）。

「す、すごいね。」

正直感心した。

我は汝
汝は我

汝 新たなる絆を見出したり
汝 愚者のペルソナを見出しあたとき
我ら更なる力の祝福を与える

「俺より田さんのほうがすごい」と思います。ゆかりさん達に色々聞いてますよ。」

色々話して今日は彼のことが少し分かった。

ちなみに彼は釣った魚は海に帰していた。キャッチアンドリリースと言つらしい。

「魚を何かと交換してくれる人がいたりすれば良いんですけどね。」
冗談交じりにそんな会話をしても私たちは寮に帰った。

番外編 愚者？（後書き）

ペルソナ4の主人公ってプレイヤーしだいのところはありますがあまり本完璧超人ですよね。

料理できて成績は学年上位（TOP？）プラモを作れと言われたら本格的に作り釣りをすれば川のヌシを吊り上げる。

楽器を演奏できて運動もこなし人望もある。

学校行きながらもバイトで下手なサラリーマンよりずっと稼ぎますしね。

まあ、そんな感じで番外編でした。

短めの話でたまに今後もやっていこうと思います。
それでは読んでくださってありがとうございます。
感想いただけだと嬉しいです。切実に…

6月1日

SIDE 鳴上 悠

俺が特別課外活動部に参加してから一週間経った。

しかしこの寮生…食生活が酷いと思う。

誰一人として自炊はしていない。

まあ自分の分だけだと外食に頼りがちになるのは理解できる。

その中でも桐条さんやゆかりさん、宙さんの女性陣は外食が多いがまだ気を使っているのはわかる。

しかし順平さんと真田さんは酷い。というか酷すぎる…順平さんはカツチラーメンばかり、真田さんは牛丼ばかり…タルタロスに通っている俺たちにとつてこのような生活で体を壊しては元も子もないと思うのだが…

まあ、俺も新しい環境だし今まででは料理していなかつたが久しぶりに料理をしようと思つて買い物をしていた。

俺は寮に帰り調理をしている。

「あれ？鳴上君なに作つてるの？」

料理をしていると帰つてきたゆかりさんに声を掛けられた。

まあ、匂いもしてゐし氣付いて当然だろうな。

「カレーですよ、皆さん分もありますよ。」

俺がカレーを選んだ理由は簡単、カレーなどは一人分だと滅多に作らないから俺が久しぶりに食べたくなつたと言うのが一つ、カレー

が嫌いという人は少ないから振舞うのには向いてると言つのが一つ、最後に余つても一日寝かせて明日食べればOK、今日何か理由があつて食べられない人が出ても次の日に残すことができる。（食べられないからと言つて恨むような人達ではないが…公平にしておきたい）「しつかしなあ、ゆかりッチ、女として間違つてると思わない？俺がこの寮に入つてきて最初に食べる手料理が最年少の男のつてどういうことだよ？」

「うるさいわね、だつたらあんたは食べないで女の子が作ってくれるの待つてれば良いじゃない。」

「こんな良い匂いがしてゐるのに食べないとかねーだろ！そもそもゆかりッチ、料理できるのかよ？」

「できてもあんたには作らない。」

「はー……桐条先輩が俺達に手料理振舞うとか考えられないし… 宙ツチは料理できそつだけど…」

「ああ。宙はねえ…」

言いたいことはわかる。宙さんはいつも帰つてくるのが遅いし、そのうえ帰つてきてもまた出かけたりとか… 手料理を振舞う暇がないように思える。

「こりなつたらやつぱり新たな新人に期待だな！」

新人？

「ああ、そうか、鳴上はちょうどその辺の話の時期に入つてきて聞いてないのか。新たなペルソナ使いが俺達の学校にいるんだよ。」「はあ… あんたまだ諦めてなかつたの？」

状況が分からぬので詳しく聞いてみると

「山岸風花つて子なんだけどね。その子尊によると身体が弱いらしいのよ。だから戦いに加わるのは難しいことになつてるの。」「俺はまだ諦めてないぜ、俺顔知つてるんだけどけつこり可愛いんだよ。」

二人の言い合ひは続いている… 口喧嘩なら俺の前でやらないで欲しい…

しかし…新しいペルソナ使いか、実はペルソナ使いつて俺が思ったよりも多い？

わりとレアな存在なんじやないかなあと思つていたんだが…加入してから一週間で新人の話を聞くとは…

そうしてこりつづけに宙さんも帰つてくる。

「ほう、鳴上、君は料理ができるのか。」

「カレーか、美味そうだな。」

「カレーの匂いつてやたらと食欲を刺激するよね…」

上から桐条さん、真田さん、宙さんの反応だ。

全員しつかりと食べてくれるよつだ。反応が楽しみだな。

「ねえ、ゆかり、鳴上君つてさ、エプロンが異常なほどに似合わない？」

「ああ…私も思つた、主夫つて感じするよね…」

その日…俺の装備品が宙さんが時価ネットたなかで買った多機能エプロンに変わつた…

「ところで、これを食べるための作法とかはあるのか？」

「お嬢様つてすごいな…カレー食べたことないとか…」

最初から驚きの事態に直面したが家族の食卓に堅苦しい礼儀など必要ない（一緒に生活しているのだから俺にしてみれば家族同様に大事にしたいと思つてゐる）。

しかしそつだな…俺にとつてこのよつな料理を振舞つた上での礼儀と考へると…

「そうですね、みんなで食事するんだから楽しく食事をしましょう。みんなで楽しく食卓を囲むことが作つた俺としては一番嬉しいです。」

「うわ、なんか鳴上カッコいい事言つたな。」

「私は彼はあと1・2年したら女泣かせになると見た。」

「ああ、顔も悪くないし…やたらともてそようだよね、彼。」

2年陣で何か「いや」と言わわれている気がする……

「そういや、お前ら、学生用のネット版とかみてる？鳴上は知らないかもしないけど先週E組の子が校門で倒れてんのみつかつたしね。」

食事の最中順平さんが俺や2年の一人に話しかけてくる

「あれ、怪談に出てくる”オンリョウ”の仕業じゃねーかつてサ。」「ああ、俺部屋にネット繋げてないんで、携帯もパケホじゃないからネットとかあまりやらないんですよ。」

そもそも俺はその掲示板の存在すら知らなかつた。

「オンリョウとか、マジやめてよ…ウソくさー！」

ゆかりさんはそういうの苦手なタイプか…

「その怪談というのは、どんな話だ？」

お…意外な人が食いついた。桐条さんが怪談話に興味あるとは意外だな。

「ちよつ！？どひせ作り話に決まつてるし、さ、聞かなくても良いと思いますが！鳴上君がせつかく美味しい料理作つてくれてるんだからそういう変な話はやめましょ。」

会話回避の手段に使われてるとしても美味しいと言わると嬉しいものだ。

「興味がある、話してみる。」

真田さんまでが食いついたって事は何かあるのかな？

「ひ…」

流石のゆかりさんも年長者一人に出られると断れないよな…順平さんは電気を消し懐中電灯でしたから自分を照らし語りだした。

「どうも、こんばんは、伊織順平アワーの時間です。」

ノリノリだなあ…

長くなるので割愛して内容を話すと

夜遅くまで学校に残つていると死んだはずの生徒、これが先ほどから会話に出でるオンリョウ、に食われるといつ怪談があるらしい。そして昏倒事件にあつた女生徒は前日の夜に学校付近で田撃情報がある。

だからこの事件はオンリョウによる事件と…

「どうい…明彦？」

「あら…？俺の熱演スルー？鳴上、お前まで適当に聞き流してなかつた？」

大丈夫です、しっかりと要点は抑えています。

「オンリョウかはともかく、調べる必要はありそうだな。」

「それはシャドウが関わっている事を考慮してと言つ事ですか？」

真田さんの発言に宙さんが問う。

「せうだ、シャドウに関しては我々もまだわかつてない。怪奇現象は念のため調べておいて損はないだろ。」

桐条さんも忙しいのにさらりと色々背負い込んでるな。

「しつかし、ゆかりッチさ、お化け苦手とか、チョイ情けないよな。

「

俺としてはお化けが苦手つて言つのは子らしくて可憐ことと思つが…（それを口に出すには勇気が足りない）

そんな事を考へていううちにムキになつたゆかりさんがこの怪談に

ついて徹底的に調べてこれがウソだと証明してやると息巻いた。

3年一人にとつてもこの流れは好都合らしく完全に乗せられたみたいだな。

「鳴上君、一応中等科のほうでも話聞いておいてね。」

俺も巻き込まれて…

週末に情報収集の報告会が行われるらしい、俺も一応明日から聞き込みしてみよ…

6月1日（後書き）

おまけ

「エクセレント！」

カレーの感想らしい

風花の料理に期待とか死亡フラグを立てつつ6月に入りました。

伊織順平アワーの詳しい内容はペルソナ3本編をご覧ください。フルボイスで語ってくれますので…

ちょうど風花加入の話が出るころに鳴上を加入させたのでその話を出すタイミングが無かつたんですね。

今後も番外編を挟みつつ口付はイベントが起るまで飛ばしていきます。

流石に毎日の細かい会話や行動を書いていたら書き終わりませんので…

ではここまで読んでいただきありがとうございました。ご意見、感想をいただけると嬉しいです。

番外編　刑死者？

SHIDE 鳴上 悠

怪談の噂集め、やれと言われても高校での噂、中学生の俺では困難だ。

俺が情報を集めなくても問題が起るとは思えないが…だからといって何もしないと言うわけにはいかないだろつ。

ならばどうすれば良いか、まずは校内での調査をしてみた。

俺は普段から校内で色々な相手と話しているため顔が広い。まあ、話はするけど相手の名前は知らないっていうことも多いんだけど…（相手は俺の名前を知っているみたいだが）

まず最初の狙いは兄や姉が高等科にいる相手、これは話を通していくまた後日にというパターンにしても良い。

次に熱心な部活動の学生。俺が所属している部活みたいに出ても出なくても良い所は上下の繋がりが薄いが熱心に活動しているところは中等科、高等科通して繋がりがある。ここは中高一貫高の強みだらう。

上は使えるやつは高校に上がってきたとき欲しいだろつしたは上と練習ができると互いにメリットがある。

特に熱心に部活やつているようなところは深夜に学校に起る怪談というのには気になるだろつ。

噂話、怪談が好きなタイプの人間は女性に多い。

学内での聞き込みは休み時間をメインに使う。放課後はそこまで遅くまで残る必要はない。

ゆかりさんが寮内の共用PCで掲示板とかは調べていたので俺は外

での聞き込みも行つことにした。

おばちゃんといつのは古今東西噂話が好きといつ。しかもそれを広めることが大好きだ。そのネットワークの広さは学生の比ではない。何故か高校の内部の噂話まで流れているくらいだ。

まあ、昏倒事件とかは良い話のネタなんだろうな。

このように数日かけて噂関連の情報収集が一段落ついた俺の次の目的地は神社だつた。

オンリョウ、怪奇現象が起つたからには大げさに騒ぎ立てて神社に頼る人も出るかもしれない。

すでにかなりの量の情報を集めてはいたし、あとは真偽の検証もないといけないが（おばちゃんネットワークは情報量が膨大だが色々尾ひれが付く）まずは情報を集めるというのが俺のやり方だ。余談だが俺の叔父には刑事がいる（どんな人かは記憶にないが）俺の聞き込み好きはその血筋だらうか…

そんな取りとめもないことを考えていると神社で、正確に言えば併設してある公園で、見覚えのある人が小さい女の子と遊んでいた。

「あ、鳴上君じゃない？こんなところで何をしてるの？」

「俺のほうは色々街中を歩き回つていたところですよ。」

流石に子供の前で怪談話は控えておきたい。嫌いな子はすぐ嫌がるし。

「暇なら一緒に遊んでいこつよー」

公園で遊ぶなんて何年ぶりだろうな

「ねえ、お兄ちゃんも舞子と遊んでくれるの？」

子供は嫌いではない、というよりも子供好きだと自分では思つ（口リコンとかそういう意味では決してない）。高校に入れば学童保育

のバイトとかをやつてみたいとも考えているくらいだ。

俺は彼女の問いに頷きその日は調査を中止し遊ぶことにした。

しばらく遊んだ後に商店街、俺達は3人でたこ焼きを食べていた。

「たこ焼き? かもしない、たこ入つて無いのもあるし:

男としてはちょっと情けないかもしないがこれは宙さんのおいづりだ。

「お姉さんはバイトもしてるんだし、任せておきなさい。」

だそうだ。確かに中学生の小遣いじゃあ買い物食いだけでもそれなりの出費だしなあ…

「お兄ちゃんとお姉ちゃんって恋人?」

この年でも女の子、そういうことに興味あるんだな。

「あはは、違うよ。学校の寮に一緒に住んでいる友達かな。」

宙さんは信頼されて懐かれているみたいで俺も話を色々聞いた。この子は今は両親の離婚問題で悩んでいるらしい。

そして俺たちみたいに特殊な関係、家族じゃないのに一緒に暮らしているという関係に興味を持つたようだ。

高校生になればそういう生活があるってことを話して今日は別れた。

「舞子ちゃんには言わなかつたけど私達の場合かなり特殊だよね。男女同じ寮だし、俺は中等科だし…

俺が寮に入つて別々に暮らしてるのはいえ両親健在で仲が良い俺は恵まれてるほうなんだろうな。宙さんも両親をなくしているらしいし…

「ところで本当は神社に何しに来たの? 恋愛祈願とか?」

「何か誤解されているようなので俺は理由を話しつつ寮に戻った。『じゃ、金曜日は期待してるね。』

番外編　刑死者？（後書き）

舞子「ミコ + 番長の情報収集話です。番長の聞き込みの上手なのは4で仲間に（記憶によると確かに雪子から）言われるほどです。4のことを考えると番長って確実に子供の面倒を見るのが好きですね。

菜々子は良い子過ぎるつていうのもありますがw

舞子とは「田を通じて今後も書きたいです。今回ばかりは出来て編つてことで。

ではここまで読んでいただきありがとうございました。ご意見、感想などをいただけると嬉しいです。

6月5日（前書き）

日付は変わつてしましましたが寝る前に完成しました。
リアルに影時間があればその時間内に完成してたのですが…（その
前に影時間はパソコンも動かなくてネットも駄目ですけどね）

今日は約束の情報確認の日。

俺も情報を集めたがゆかりさんが張り切つてるので仕切りは任せることにした。

情報量はともかく情報の正確さでは高校のほうが確実っぽいしな。「ハイ、では月曜に約束したとおり、集めた情報の確認回をします」。

「おー、ノリ気じやん。」

順平さんはこれは調べてなさそつだな…

「当然。私的には、バツチリ色々掴んで来たから。例の噂はやっぱりオンリョウの仕業じやないよ。」

「いやー、ゆかりが張り切つて調べてくれるといつもは楽で良いよ。」

「…もしかしてまじめに調べたの俺とゆかりさんだけじゃないのだろうか…」

「オンリョウじゃないのが重要なんだ…」

人は未知のものに恐怖を抱くと言うからな。正体を知つてしまえば恐怖心はやわらぐ。

「まず、この怪談騒ぎのそもそもその発端からだけど…校門で倒れていた子の話は確かにちょっと怪談の内容に似てる。でも、一人がそういう目に遭つただけでこんな騒ぎになったのは、何故でしょう?」クイズ形式になつたようだ、他の人たちがちゃんと調べているのも気になつてゐるっぽいな。

「そりゃーダイイングメッセージがあったとかじゃない? ほら、ホラーによくあるじゃない、襲われる直前まで日記書いてたやつ。」

「あー。あるよな、書いてる間に逃げろってやつ。」

「違うから、そもそも被害者死んでないから…。」

「遊んでるな、俺が調べていることはこの前話したから知っているんだろう、俺に答えると視線向けてくるし。」

「被害者が一人ではなかつたと言つことでしょ。俺の場合事実確認とかできなくて尊頼りですが… 3、4人と聞いています。」

「なんで中等科の鳴上君があんたらより詳しく知ってるのよ。そ、私も調べて驚いたわよ、最初の事件のすぐ後に二度も同じこと連発してたんだから。」

正解したようだ。おばちゃんの方は尾ひれ付いて10件とかの話もあつたからな… 学校で聞いた話が正格だつたようだ、こうこうときの情報の選択は難しい。

「怪談と同じ状況で3人ですかね。」

「うん、騒がれるのも当然つてわけよ。」

逆に考えれば3人異常な状況で倒れていることでもあるが

「え、では次。被害にあつた3人がクラスがバラバラで一見、何の関係も無いみたいに見えます。」

でも実は、水面下に共通点があつたの。その意外な共通点とは何でしょう?」

俺もこれを調べて驚いた。順平さんの怪談では倒れた子はそういうことする子じゃないということだつたからな。

「何なんだよ、クイズ形式でずっとやるのか? 被害にあつた3人の共通点つて…?」

「ああ、よく出家してたつて話だよね。」

出家は複数回するものではないです…俺の勘違いだった、この人絶対分かつて遊んでる… しつかり調べた上で俺達の調査状況を確かめてるのか?

「出家じゃなくて家出です。ちょくちょく家を出てて幾つかのグル

ー プと関わっていたという話を聞きました。」

「鳴上君、よく調べられたねー。宙は明らかにふざけてるけど順平、あんた調べでないでしょ。」

「今日はたまたまです。高等科と繋がりのある知り合いも結構いるので。」

「お前顔広いんだな。」

まあ、でも実際こういう件は女子のほうが噂を集めやすいだらう。「この3人、同じ状況で見つかってるんだから、この繋がりはゼッタイ何かあると思う。よつて、更なる真相に近づくべく、現場取材を決行することにしたから。」

「は？ 現場取材？」

「現場ってことは不良のたまり場か？」

「被害者の3人が決まって夜明かしした”溜まり場” ってのがあるらしいの。」

「お、おいそれ、もしかして、ポートアイランド駅前の裏入ったとこの……」

「あそこか！？ 結構危険なんじゃないか

「なんだ、知つてたの？」

「あそこヤバいって！」

「俺もそう思います。調べるためとはいえ危険な場所に出入りするのは。」

順平さんの発言に同意する。俺と順平さんはともかく女性と一緒にだといこやと言つとき逃げられう保証がない。

「危険なの？ なら尚更みんなで行かなきや。」

「いや、俺や順平さんはともかくゆかりさんや宙さんは危険だと思いますつて。」

「つて鳴上、お前は行く気かよ。」

「頼もしいじゃん。宙はどう？」

「倒れたのも女の子でしょ、大丈夫、なんとかなるつて。」

うちの女性陣は怖いものなしと言つて。」

「俺、行きたくねーなー…あそこマジ、マンガみたいに荒れてるんだよ。」

「無駄ですよ…あの一人ノリ気だと俺たちでは止められませんし…それに拒否して女性達だけで行かせるわけに行きませんし…」「そうだよなあ、まあ、いざとなつたら逃げれるようにしておいつぜ。」

「決まりね。明日の夜に出発だから、そのつもりでよひしく。あ、

鳴上君は中学生だし、寮にいたほうが良いかな?」

「おーおい、男が俺だけかよ! それは無いだろ!」

「この状況だと寮で待っているほうが不安なんで俺も行きますよ。」

「おー、鳴上君、男前じやん、順平ともども頼りにしてるよ。」

「むしろ俺と順平さんの一人で行つても良いですよ。」

そのほうが穩便に済みそうな気がしたが却下された。

明日の夜か、何事もなければ良いんだが…

6月5日（後書き）

日付変更前にだして本田一本を田舎しましたが間に合ひませんでした。

原作の会話に調査を進めた番長が介入したといつだけの話です。
宙は間違った選択肢をわざと選んで遊んでいます。

ここでは怯える順平の態度のほうが正常だと筆者的には思います。
がここで向かつて貰わないと物語進みませんしね。

ではここまで読んでくださつてありがとうございました。
ご意見、感想などをいただけると嬉しいです。

6冊6冊（前書き）

今日は短めです。

予定通り今夜は路地裏に向かわなければいけない。

やたらと乗り気なゆかりさん。いかにも嫌そうな順平さん、なに考
えているのか分からぬ宙さん。

「いや、鳴上、俺が嫌だつてのもあるけどそれ以上に女の子二人を
心配してゐるわけ。オンリョウは駄目なのに不良は怖くないつておか
しいとおもわねえ？」

「駄目とか言わない。見えないものは誰だつて気味悪いでしょ。
目に見えない恐怖と実際の脅威は別物だとは思つが……」この辺の感覚
は人それぞれなんだろうな。

「見えるほうが怖いだろ？　が！　バットとか、光りモンとかさ！」
光りモンはともかくバットは多分携帯して無いだろ？　目立つし邪
魔だし。

「もう……フリーの溜まり場くらい何よ？　鳴上君のほうが落ち着いて
るわよ。」

「いえ、俺も怖いですよ、もう諦めただけです。」

「諦めんなよ！ 最後まで抵抗しろよ！」

「いつまでも言つてないで行くわよ。」

「あはは、危なくなつたら守つてね、期待してるから。」

「お、おお、なんだよ、しょーがねーなあ！ 任せておけ。」

結局順平さんも上手く乗せられているな。女の子に守つてつて言わ
れると抵抗はできないのは確かだが

「ほら、鳴上、行くぞ！」

頼りにされているのが嬉しいのか、先ほどよりも乗り気だ。まあ、決まったことに文句言つより良いだろ？。とりあえず退路だけは確保しておく用意しよう。

辰巳ポートアイランド駅の近く、結構人通りもある。まあ、いわゆる不良の溜まり場とここのではあるが全員が仲間同士とここのわけではない。

「…んだ、あれ？」

「つか制服…月高じゃん？」

制服は目立つと思い俺は着替えてきたが他の人はそのままだ。

「ヤベエ、想像してたよりずっとヤベエ。」

俺は想像したよりはましに感じる。これなら話の持つて行き方しだいでなんとかなるかもしれない。

「とつと、お前らで、遊ぶトコ間違えてんじゃねえの？」

「あ…いや、」

「お前らみたいなのが来ると場がしらけるんだ、帰れよ、ひげおくん。」

順平さんに任せたわけにいかなううだな。俺が前に出たと思つたがそれより先にゆかりさんが出る。

「ここの来るのは、なんで、あんたの許可がいるわけ？」

「ちよつ、おまつ、バカかよ…」

ヤバイな、この雰囲気は…

「オマエあれか！？空気読み人知らずか！？」

「なにこんな連中にビビってるのよ…」

こういうときに必要以上に怯えるのも挑発するのも駄目だろ？。

「ああ…」

「…こんな連中、つづったよ、そのコ」

「いやー、『めんね、私たちまだこの辺慣れてないだけよ。』」

「謝つてすむモンじゃないでしょ、いつなつたらセクシィな写メとか取つっちゃおうかしら。」

「こいつら、サイツテー…」

「これは交渉相手を他に移したほうがよさそうだ。これ以上こいつら相手には情報収集は難しそう。」

「もう行きましょう、この状況では目的果たせません。」

「俺はさりげなくを装いゆかりさんと宙さんを後ろに庇う。」

「待てよ、サイテー呼ばわりして帰れると思つてるのかよ。」

「向こうが拳を振りかざし殴りかかる。がこれは予測の範囲内、一応日々シャドウと戦っている身だ、拳で殴るのは慣れていないが避ける技術は人並み以上はある。」

「てめえ、避けてるんじゃねえ!」

「これはもう避けられないか…向こうに増援が来るかもと考えたら相当不利だ…」

「その辺で良いだろ。」

そこに6月だと言うのにコートを着てニット帽を被った人がいた。

「しらねえで来てるんだ、俺が追い出す。良いだろ、それで?」

「バアカかテメーは。いまさらそんで済むかよ! てめえもやんぞ、

「ラ!」

俺たちと争っていた不良が殴りかかるがそれをあつさりとかわしたうえに頭突きを叩き込んだ。

「うおつ…つ、つええ…」

「ガキ相手にムキになってるんじゃねえよ。」

それを言つとようやく俺がかなりの年下と気付いたのか、それともこの人を相手にしてまで締めるような相手ではないと判断したのか

「ちつ、もう良い、今日はここで引いてやる。」

「てめえ、確か荒垣真次郎、こいつらと同じ田高だよな、次はこいつはいかねえぞ。」

連れ共々も捨て台詞をはいて去つていった。

「スゲーッス！先輩、つえーッス。」

「助かりました。ありがとうございます。」

「その顔…お前ら、アキの病室にいた…」

「俺以外の3人はこの人と面識があるらしい。」

なんでも真田さんが検査入院してお見舞いに行つたときに会つたらしい。

「…バカ野郎が！帰れ、お前らの来るところじゃねえ。」

言葉使いは悪いが俺たちを気遣つてくれているようだ。

それだけ立ち去ろうとする荒垣さんをゆかりさんが止める。

「待つて！ごめんなさい…でも私たち、知りたいことがあつて來たんです。」

「…アキに言われてきたのか？」

「違います、私たちの意思で調べに來たんです。」

荒垣さんの問いに宙さんが答える。

まあ、真田さんは人にやらせるより自分で来るタイプだ。荒垣さんもそれを知つてゐるんだろう。

「知りたい話つて何だ。礼の怪談とやらか？」

その後、俺たちは聞いた話によると倒れた女子生徒たちはやはりここに集まつていたらしいこと、そしてそいつらの共通点として『山岸』という同級生をいじめていたらしいことを聞いた。

その山岸さんは俺がこの前聞いた新しいペルソナ使いの山岸風花さんだということ、そしてその山岸さんが一週間前ほどから家に帰つていがないということ、それが原因で犯人は山岸風花の”オンリョウ”という噂もあることを聞いた。

「これはすでに怪談で済まされない問題ね。」

「担任つて江古田でしょ、このこと知つてゐるのかな。」

確かに、担任が知つていて上に話を通した場合理事長からこのことは俺達に知らされていたはずだ。

「そうか…アキのやつ…つたく、過去を振り切れねえのはどっち

だつてんだ……」

真田さん？荒垣さんは思つたより真田さんと古い付き合いなのか？
なにか知つていそうだが……はつきりとは聞き取れなかつたが……

「なんでもねえ……知つているのはそんだけだ。……もう良いか？」

自分に向けられた視線に對して荒垣さんはそう答える。

「ありがとうございました。おかげで助かりましたよ。」

俺たちは礼を言つて新垣さんと別れた。

言葉使いは悪いがすごく優しい人だつたな……

6月6日（後書き）

荒垣さん登場。

情報収集の会話シーンは難しい、原作主人公はほとんど喋らないし…原作を少し変えるくらいが精一杯です、説明を受けるだけの場所は端折つてしましました。自分の技量の拙さに反省。

さて、次回は満月の日ですね。そつちは上手く書けると良いなあ。ではここまで読んでくださってありがとうございました。

ご意見、感想をいただけると嬉しいです。

6月8日?

SIDE 有里 宙

昨日は真田先輩や美鶴先輩に私たちの無茶な行動を説教された。
なんとかなるかと思つたどやはり無茶だったかなあ…

まあ、本当に乱闘になつてもなんとかなるとは思うんだけどね。
それでも無茶しただけの価値のある情報だつたと思つ。

今日は私たちは山岸風花の担任、江古田を問い合わせに職員室に向かつた。

そこには先に来ていた美鶴さん、そして山岸風花いじめを行つていたもう一人の人物森山夏紀がいた。

彼女たちは5月29日に悪戯のつもりで体育館に閉じ込めた。
いじめ仲間の一人が夜中に様子を見に行つたらしいがそのまま帰つてこなくなり怪談の被害者になつたわけ。

わりと深刻ないじめだがこここの学校が普通の学校ならまだましだつたけど…この学校は影時間にはタルタロスになるのよね…
結果として山岸風花は行方不明になつちゃつたつてわけ。

恐怖という理由もあると思うけど森山夏紀は反省をしているみたいに見える。問題はその事実を知つていながら隠していた江古田よね…生徒の将来のためとか言い訳をしていたけど…結局は保身のため。まあ、その後美鶴さんが切れてたし…多分何かの処分下るだろうなあ…権力者を怒らせてはいけないよ。

そしてもう一つの重要事項、今回の事件の被害者は全員妙な『呼び声』を聞いたことだ。

つまり今まで無気力症の被害者を事前に知る方法は無かつたが『呼び声』を聞いたことだ。

び声』と、こう手掛けりがあるといふことがわかつた。

つまりシャドウの被害は偶発的な事故ではなく明らかにシャドウが人間を狙つてゐると言つことになる。

私たちは森山さんを寮で保護することにし、放課後に山岸風花救出作戦を練ることを約束し教室に戻つた。

SIDE 鳴上 悠

「今夜、この学校への侵入作戦を行う。目的は山岸風花の救出だ。事前にメールで昼休みに行われた尋問については知らされていたので驚きはしなかつたが…」

わざわざ高校に呼び出されるとは思わなかつた。

多少は目立つが放課後なら入れないわけではない。校門まで順平さんが迎えに来てくれたし。

「あの、イマイチわかんないんスけど、山岸って、ガッコの中にいるんスか？」

「しかも、なんで夜に？ 0時になつたら、学校は…」

順平さんやゆかりさんは疑問に思つてゐるようだ。確かに、俺も疑問に思つところだ。

「0時に学校にいたからってことじゃない？だから正確には学校ではなくタルタロスにいるそういうことですね？」

宙さんが答え桐条さんが補足する。

「その通りだ、山岸は学校がタルタロスに変わつたときそのまま迷い込んだのだろう。」

「じゃ、おやか山岸もんつて体育館に閉じ込められてからずっと…」
「…そうだ。」

「そんな！10日も前の話じゃないッスか！」
「10日か…わりと絶望的な日数に思える。」

「それ…どう考へても…」

普通に考へればもう手遅れだらうな…

「いや、悲観するのは早い。」

暗くなつたところで真田さんが口を開く。
「タルタロスは影時間の間しか現れない。なら山岸風花は、日中は

何処にいると思う？」

「言われてみれば…」

「こいつは仮説だが、恐らく山岸はあのときからずっと影時間に居るんだ。つまり10日といつても、山岸にとつては影時間を足し合わせた分しか時が過ぎてない。生存の可能性はある。」

確かに、タルタロスや影時間に關してはまだまだ謎が多い。希望的観測ではあるが可能性はありそうだ。

「おおっ、マジッスか。あ…でも影時間つて慣れた俺らでも居るだけで結構バテるじゃないスか。あれを10日ぶつ通しつてのは…」「そういうえばそうね、それにたとえ見つかっても場所によつては辿り付けるかどうか。」

順平さんとゆかりさんが不安要素を挙げる。

「なら、このまま見殺しにするか？！」

「見つかるかどうかに關しては手段はあるわ。」

それらの発言に對して宙さんが口を挟む。

「だからわざわざタルタロスにではなく学校に侵入するつて話が出たわけ。ですよね？」

そういうことが

「つまり俺たちも山岸さんと同じ方法でタルタロスに…具体的には体育館で影時間を迎えるということですか。」

そうすればたゞり着けないとこつことにはならない、彼女も移動し

てこる可能性もあるがそこいら辺は論じても意味のない」と。

「そういうことだ。」

「危険性はある。正直に言えば私はこの作戦には諸手をあげて賛成はできない。最悪一重遭難という可能性もある。しかし

「助かる可能性があるので、放つておくことなんてできない…」

真田さん結構熱い人なんだな。なんていうか、今までわりと空氣的に目立たない人だったが

「…後悔はしたくないんだ。お前らが行かないなら俺一人で行く。」

「私も行きますよ。もとより危険は承知のうえで入部したわけですし。」

「…まあ、そういうよね、助けられる可能性があるのに放つておくわけにいきませんし。」

宙さんの意見に俺も続く。

「わかった。危険は承知だが、このまま放置するわけにいかないからな。」

「そうですね、やつてみないとわからないし。」

桐条さんとゆかりさんも賛成し作戦の決行が決定した。

「おし…夜の学校に侵入か！へへつ。そうと決まればあれだな…」

「順平さん、何をするんですか？」

「侵入つて言つたらアレだろ。俺に任せておけつて。」

順平さんが自信満々で侵入のための仕込をするといつて去つていつた。

6月8日～（後書き）

執筆の時間的都合も含めて今回は分割します。

明日上げることを目標にします。

結構読んでくださっている方もいらっしゃるようで嬉しいです。

PVアクセスももうすぐ2万に届く勢いです。

ちなみに作中で真田を空氣呼ばわりしますが全て私の責任ですね。
人数多くても回せる作家さんはすごいと思います。

筆者はP3Pやつてからはわりと好きなんですね、昔はタラン
ダ先輩呼ばわりされていましたが『直接指示する』だと低下系キヤ
ラは便利ですし…

ではここまで読んでくださつてありがとうございました。

ご意見、感想などをいただけた嬉しいです。

SHDE 鳴上 悠

作戦決行前の寮、俺たちは全員準備を済ませて集まっているのだが
…どうやら理事長に連絡が取れないと…

俺の両親を説得してこの寮に入寮することを決めたときは少し見直
したがまた俺の中で『使えないおっさん』の称号に逆戻りしそうな
感じがする。

「まあ、いいんじゃないですか?」

ゆかりさん発言に同意だ、あのねつたといらないだら、どうせ
ペルソナが呼び出せないわけだし。

「一つだけ面倒がな。理事長の口添えがないと夜の学校にどう入っ
たものか。」

…「…」

「それ、心配なく。その事なら『仕込み』が済んでマス。」

仕込み? そう言えば順平さん作戦会議の後何かやつてたな。

「仕込み…? 爆弾か?」

…桐条さんがちらつと物騒なことこいつる…

「鍵開けといったつてだけなんだけ…」

「…」

「…」

お約束だが有効な手段だ。順平さんが昼間のつりに開けておいた窓
から俺達は学校に侵入した。

夜の学校に山岸さんが放置された件といいわりとの学校セキュリ

ティ緩いな。

順平さんはブリリアントの意味が分からずほめられて「…」ことが良くなかった。ようだつたが…

とりあえず侵入したは良いが体育館の鍵は掛かつたままだ。まずはとりあえず入手しなければいけない。

可能性は職員室か校務員室。一手に分けて行動して探すことになる。

「職員室のガサ入れか…テストの問題あるかも?」
「ウヒヒ…」

余計なことは口に出さないほうが良いと思つ…

「私の目の前で不正の算段か? 事実なら処刑だな。」

本気なら黙つてやるべき、冗談なら相手を見てやるべき、どちらにしろこれはなあ…

「う、嘘に決まってるじやないスか、嫌だなー、もー。」

どちらにしろ中間テストが終わつたばかりの今の時期、テスト問題なんて老いてないと思うが。

「…なら、伊織は私と校務員室だな。鳴上、この学校のテストと無関係な君はそちらに行つてくれ。あとはそちらに何かあつたときの指揮官として有里も。あと明彦か岳羽、どちらかを連れて行け。」

「あ、それじゃ、ゆかり、一緒に行こつか。」

ところでこちらのメンバーは俺と宙さん、そしてゆかりさんとなつた。

「おい、鳴上、もしテストが見つかつたら俺にこいつやつ…」

「伊織」

「なんでもないです…」

「順平さん、そもそも俺では見つけることすら難しいですから。表記されていなければどれも俺にとつては習つていらない内容、どの学年か区別が付かない。職員室の席の配置すら分からない。」

「はあ…しかたない、諦めるか…ゆかりツチや宙ツチはやつてくれそうにないしなあ…」

実力でがんばつてください。

「あのさあ、ゆかり、じつは潜入ミッションのときは普通携帯の電源切らない?」

職員室に向かう途中、俺達は一度警備員に遭遇しそれをやり過、「」した直後にゆかりさんの携帯が鳴り出したのだ。

俺としては狭い柱の影に女性一人に挟まれて隠れたのでそれビームではなかつたが…

「し、仕方ないじゃない。」

「せめて迷惑メールに對して着信拒否くらいしなよ。それにビームすぎ。」

「ふ、普通この状況でいきなりなつたらビームでしょ! 鳴上君もやう思つよね。」

この状況で俺にぶられるのは勘弁して欲しい、女性一人に挟まるるのは気まずい…

「ま、まあ状況的に仕方ないと思ひます…」

「こ」であまりゆかりさんを怒らせないほうが良いだろ?…俺は一人を宥めつつ職員室に向かつた。

職員室、鍵置き場はあつさり見つかつたが暗い中では鍵のタグを見極めるのが難しい。

「ねえ、鳴上君、この鍵なんてかいてある?」

「えー、ゆかり、なんで私じゃなくて鳴上君頼るのー?」「あんたは絶対適当なこと言つて私を驚かすでしょ…」

「あはは、ばれた?」

安心なことにわざのことは引きずつてないよつだ。

「えつと、体育館ですね。」

俺達は無事体育館の鍵を見つけ戻るうとした。

「ところでさ、冗談抜きで思つたんだけど。」

「またにからかうつもり？」

「いや、まあ、ふと疑問に思つたけど…ここに隣つて保健室よね？」

「それがどうしたのよ？」

「いや、保健室の責任者つてあの江戸川先生でしょ？」

「話が見えない…」

「本当に何か出そうで私も怖くなつてきたんだけど…」

「う…確かにあの先生なら何かありそう…」

江戸川先生というのは保険教諭も兼任してゐらしきが…授業であやしいことを話す先生らしい。

俺達は急ぎ足で合流地点に向かつた。

「鍵は見つけましたよー。」

俺たちが行つたときすでに桐条さんたちは合流地点に居た。

途中順平さんがゆかりさんをからかう場面もあつたが無事目的を果たしたので次の段階に移ることになる。

「よし、改めてチームを二つに分ける。4人がこのままタルタロスへ突入、私とあと一人が外でスタンバイだ。影時間に入つたら私が位置を割り出す。」

なるほど、今回の作戦上念のためバックアップのほうにも一人動ける戦力を置くということか。

「俺は突入班に入る。」

真田さんが真っ先に名乗り上げる。

「それと、お前も來い、有里。また仕切り役をやつてもらう。」

突入組のリーダーは宙さん、妥当だと思う。

「俺も連れて行つてください。もし強敵に遭つたら俺の援護能力は役に立つと思います。」

俺も突入組に名乗りを上げる。

「あ、じゃあ、4人目は私で…！」

「ターム、タイム、ゆかりッチ。ほら、俺、前にモノレールんと

き実力出せなくてメーワクかけちつたじやん？恩がえしつつーかさ。

汚名挽回さしてくれよ。」

汚名は返上です、または名誉挽回

「そうだね、ゆかり、回復の魔法があるゆかりと鳴上君は分けたほうが良い。今回は順平に来てもらうことにしよう。」

リーダーらしく宙さんがそう決断する。ゆかりさんは桐条さんと二人になるのは躊躇いがあるみたいだつたけど、ロロにも出せず男三人？宙さんに決定した。

「そろそろ時間だ。」

「行くぞ。」

影時間

「こゝは…どこだ？」

影時間を迎える俺達は体育館に待機し、タルタロスに突入したはずだ。「はじめまして、イレギュラーの少年よ、君は自分の名前が言えるかね？」

タルタロスとは違う狭い部屋…俺の目の前には仮面を付けた男がいた。

「名前？鳴上悠だが…あんたは？」

怪しい仮面の人物だが俺は何故か名乗ったほうが良い気がして正直に答えていた。

「私の名はフイレモン、本来はここに来て自分の名を名乗ることができる強き精神力の持ち主にペルソナを与えているものだ。」

「ペルソナを与える…？」

「そう、本来ならここにはじめて訪れるときにペルソナ能力を得る。そして君達のような自らペルソナに覚醒したものはここには来ない。」

「

「ならなぜ俺はこゝに？」

「君がイレギュラーな存在だから。本来君はこのとき、この場所には居ない人物。別のきっかけで別のペルソナに目覚めるはずの者。」
…何を言つてゐるのかさっぱり分からぬ。

「私がここに君を招いた理由。君はまだ契約を果たすときではない、しかしこの試練に君が挑むことになつたからには今の力では足りないだろう。君も有里宙と同じワイルドの力を持つもの。」
宙さんと同じ…？俺にも複数のペルソナを扱うことができるといふのか？

「その通りだ、だが今の君では限度がある。人との絆借りること、そうすることにより君の可能性を増やすことができる。」

俺の心を読んだみたいに答える…

「さあ、そろそろ行くが良い。」

「う…夢…か？」

少しの間意識を失つていたようだ。何か夢を見ていた気がする…夢なのかな…？なんかやたらと現実感があつたな。

「な…み、聞こ…か？」

桐条さんからの連絡が入るが、ノイズが多くて聞き取りづらい
それにタルタロスに入つたときに他の人たちと逸れたのか姿も見え
ない。

「バラバラに…れぞれが行動し…探してくれ。」

それだけが聞こえ音が途切れる。

どうやらバラバラに飛ばされてしまつたので単独で仲間と山岸さんを探さないといけないようだ。

俺のペルソナは単独行動には向かないが…そつも言つていられないか。

自分の装備を確認し（武器はタルタロスで見つけた数珠丸恒次、防

具に多機能エプロン、足にはハイテクサンダル）…やばい、自分で不安になってくる…回復アイテムも持っているがそつちは自分の魔法で補える。

少々時間は掛かるかもしれないけど…まあ、がんばって進もう。

俺は地道に戦いながら少しづつ探索を進めていった。
そのうち不思議な声も聞こえてくることに気が付く。

「人がいるの…？」

この声は山岸風花さんか？声が聞こえるといつても位置の特定は難しい、俺のペルソナにも探索能力があればな…直感に従い俺は進んでいく。そうすると見覚えの無い少女が目の前に居た。

すみません、3分割するところになってしまいました。

今回はオリジナル展開を挟みました、

フィレモンが登場したらペルソナ3と4だけのクロスではないと言
われそうですが…

正直今回の展開はすぐ済みました。

でも作者的にどうしてもやりたいことがあつたのでいつもあること
しました。

ではここまで読んでくださつてありがとうございました。

ご意見、感想などをいただけると嬉しいです。

次の話もなるべく早くあげよつと思います。

SHDE 有里 宙

私はタルタロスに入ったときは仲間たちと逸れたが無事真田先輩と順平とは合流できた。

そこで道中で聞こえた声に對して相談していた。

あれは恐らく山岸さんだろうけど… それはそれとして鳴上君は無事かなあ。援護タイプが単独行動ってわりと危険だよね。

そう考えていると…

「あ…！」

青白い顔した女の子が通路から出てきた。

「山岸風花か？」

真田先輩が尋ねる。

「ははははいっ！えっと、あなたたち、鳴上君つて子の仲間… ですよね？」

「鳴上に会ったのか？」

「はは、鳴上君はあなたたちと早急に合流するため道中に居る怪物を引き付けて…」

「なに！？どこだ、俺たちも行くぞ！」

SHDE 鳴上 悠

「なるほど…つまりなんとなく気配を感じることできる、やうにこう」とですか。」

俺は無事発見することができた山岸風花さんに事情を聞いていた。
「うん、それでこいつてどこなの？私学校にいたはずだけど…」
最初はひどく警戒されていたが（刀持つてエプロン付けてサンダル
はいた男なんて不審者以外のなんでもない）俺が彼女を救出に来た
ものと説明し、なんとか納得してもらえた。もし俺の伝達力が低か
つたら危なかつたな…

そのとき俺が年下とこいつとも話した成果言葉使いも碎けたものと
なつた。

「詳しいことは後で説明します。それより他にも仲間が居るんです、
オチらと合流しないと…位置とか分かりませんか？」

もし彼女の話の通り彼女のペルソナに探知能力があるなら闇雲に歩
きまわるよりは確実だろつ。

「位置…なんとなくわかるけど…」

彼女の説明を簡単に図解化すると

俺達 シャドウ 宙さん達

こうこうう配置になつてているらしい。遠回りするルートがあるとは限
らない上に彼女たちも動くだろつ。あまり遠くに行き過ぎると探知
範囲からもれるかもしない…

「わかりました、では…」

作戦は単純、俺が敵をひきつけている間に風花さん（名前で呼ぶ許

可は貰つた)が宙さんたちを呼んでくる。

ルート上にいるシャドウは一塊で俺がなんとか引き付けることがで
きた。

…が

「まさか別方向から増援が来るとは予想外…」

「…こういうときに攻撃する手段が剣だけなのが辛い…」

「はつ…」

しまつた、こいつ…剣が通じない…くそ…時間を稼ぐしかないのか…

『我は汝
汝は我』

…な…これは…セイメイではない!?

『私はあなたの心の海より出でしもの
水の中で生きるもの…アプサラスなり』

俺の頭で先ほど見た夢が蘇る

「人との絆を借りること、そうすることにより可能性を増やすこと
ができるだろう。」

そして頭に浮かぶのは先ほど協力体制をとることになった山岸風花
さんの顔…

俺は目の前に見えた可能性、アプサラスに自分のペルソナをチエン
ジする。

「来い!アプサラス」

アプサラスの持つ能力氷の力を持つブフを放つ。
敵が凍りつき転倒する…よし!いける、俺は新たな力アプサラスと
セイメイ、二つの力を使い戦いを続ける。

私たちは山岸さんに連れられ鳴上君の救出に向かった。

「アプサラス！」

これは…ペルソナチョンジ！？鳴上君にもワイルドの力があるのは分かつてたけど…この状況で目覚めたの！？

「おいおい、鳴上にも複数のペルソナがあるのかよ、聞いてないぜ。」

「そんなこと言つている暇が、助けるぞ！」

確かにそうだ。私たちはそのまま敵の掃討戦に入った。

「鳴上、お前も複数のペルソナを扱うことができるんだな。」

敵を殲滅し鳴上君と合流した後私たちは彼に話を聞いていた。

「ええ…ですけど宙さんほどの能力は無いようですね…俺では宙さんほどの数が無い上にセイメイ以外の力はほとんど成長もしません。」

「新しい能力に目覚めたばかりで使いこなせていないのかな？」

「焦つたぜ。お前もものすごく強くて俺ツチの立場無いくらいになるかと思つた。」

「あはは、他のはあくまでサブレベルの能力ないよつです、基本セイメイの力で戦うしかないようですね。」

「それより早く脱出するぞ、山岸の体力も心配だ。」

「そうだ、風花さん、助けを呼んできてくれてありがとう」「やここまで
す。助かりましたよ。」

「助けてもらつたのは私のほうだよ。ありがとうございます、鳴上君。」

「私たち話しながら戻ることにした。」

SIDE 鳴上 悠

俺達は無事合流しタルタロス内部で見晴らしの良い通路を歩いていた。

けつこう高いところなんだな

「月、デカッ！…明るッ！…」

丸い月が大きく見え、とても明るい。

「…つてか。こんなにぎらぎらしてたっけか？」

「前の満月のときもこんなものでしたよ。」

俺が初めて影時間で体験したときだ。はつきり覚えている。

「前の満月だと？」

「ええ、俺が初めて影時間で体験したときですから。」

「お前が初めて体験したときだと！？あれは確か大型シャドウが出
たときだつたな？」

「な、なんスカ！？それがどうかしたんですか？」

「おい、有里、4月に寮が襲われたとき月を見たか？」

「え…？たしか…丸かつたような気がしますけど…」

「真田さん…？何かに気付いたのか？」

「今日が6月8日…大型シャドウとの戦いのときが5月9日…寮の

襲撃は4月9日…全て満月だ！」
え…つと…どういうことなんだ？

「美鶴、聞こえるか！？」

先ほどより通じやすくなった通信機に真田さんが呼びかける。

「…明彦か…シャ…ウが…」

「おい、聞こえているのか？返事をしろ、美鶴！」

「…気をつけ…」

通信が途切れた

「美鶴！？おいつ！」

「なに…これ…」

風花さんが何かを感じた？

「今までのよ…ずっと大きい…しかも…人を…襲つて…」

「もしかして…大型シャドウは満月の夜に来るつてことですか？そして今下に！？」

「おそらくはな、急ぐぞ！」

宙さんの発言に真田さんが答える、満月にそんな規則性があつたのか、俺達は急いでエントランスに戻った。

「美鶴！」
俺たちが戻ったときにはすでにゆかりさんと桐条さんは負傷していた。
相手は大型のシャドウが…2体！？

「これは…！？」

「真田さん、シャドウの気を逸らさないと！」

「分かつて…貴様らの相手はこつちだ！」

相手の注意をこちらに向けさせようとする。

「明彦、気をつける…こいつら…普通の攻撃が効かない…。」

くつ……確かに言われたとおりだ……剣できりつけの魔法を放つも通じない……

そうして威嚇をしてこちらに注意をひきつけている……なんで一般人が影時間に！？

誰かがタルタロスのエントランスに入ってくる。

「ふ、風花……」

「ばかなつ、何故来た！？」

入つて来たのは……寮に保護していたはずの森山さん……？

「逃げてつ！……こには危ないから！……」

風花さんが声をかける。

「わ……私、あ、あんたに謝らなきやつて……」

つて見てる暇じゃない！シャドウの攻撃は続いている。順平さんが二人を庇つて負傷する。

「森山さん！私が……守らなきや……」

あれは……念のために持つてもらつていた召喚機！？それに彼女は俺が召喚をしているのも見ているはず……

「山岸さん……！？」

ゆかりさんが声を上げる……ペルソナを召喚している！？

「私……見える……私……あの怪物たちの弱いところ……なんとなくだけど……見えます……」

やはりか……

「思つたとおりだ。」

そう……風花さんのペルソナは探知系……おそらく探知能力は桐条さんより上！

「美鶴。バックアップは彼女が代わる。こいつらは俺たちが片付ける……」

真田さんに合図で俺達は戦闘に突入する！

「おつけー、それじゃあ山岸さん、あいつらの弱点を探つて、掛かるであろう時間は……私達が稼ぐ」

敵を探る能力……アナライズができるとこつても多少の時間は掛かる。

まずは俺たちがその時間を稼ぐ。

「とはいっても…ひきつけてる間にけつこうダメージも負つてるぜ…」

その通りだ…しかし時間稼ぎなら…『アプサラス』をつけて畠さんと会つたときわかつた、この力の使い方が、俺は畠さんのほうを見る。彼女も俺を見て頷く。

「アプサラス！」

「オルフェウス！」

「カデンツア…！」

ミックスレイド…二つのペルソナの相性があつたとき特別な力を発揮する…！

俺達全員の体力、傷を癒しかつ、回避能力を増す！

「お、すげえ！」

「これは助かる！」

「よつし！これなら時間稼ぎくらい余裕だぜ…」

俺達は敵の攻撃を回避しながら風花さんがの分析を終えるのを待つ！

「敵、女帝タイプ、魔法は効きません、打撃で、逆に敵、皇帝タイプ物理攻撃は効きません、魔法で…」

おかしいな、さつきそれで攻めたはずだが…まあ、良いそれが判明したのなら…

「順平、鳴上君と女帝タイプを！真田先輩は私と一緒に皇帝タイプに攻撃！」

「おつけー、任せておけー！」

「了解だ。」

アプサラスでは力不足…だから俺はセイメイにペルソナを変え物理攻撃が得意な順平さんと組んで攻撃を仕掛ける。

真田さんはわりと万能タイプ魔法攻撃力もかなりある、畠さんは言うまでも無くオールマイティ。

「よつし、鳴上、援護しろ」

「はい！…セイメイ、タルカジヤー！」

攻撃能力を上げる魔法タルカジャで順平さんを強化し攻撃を仕掛ける。

向こうも剣を振り回し攻撃を仕掛けてくるが…

「メディア！」

負傷しても俺は癒し、順平さんが攻撃、よしーーの連携ならいける…

…と思つたが…

「うお、急にこいつ攻撃効かなくなつたぞ。」

「こつちもよ！」

急に俺達の攻撃が通じなくなつただと…？

「風花さん！もう一度分析を！」

「う、うん…え！？さつきと弱点が変わつて、先ほびび反対女帝タイプには魔法、皇帝タイプには打撃で！」

とは言つても…

「そつ簡単に相手はシフトできねーぜ」

そつ、後方支援の俺はともかく前線で敵を抑えている順平さん、真田さんが相手をシフトするのは難しい。

「くつ、戦えないことは無いがわざわざ非効率に戦うのはな…」

「鳴上！こつは俺が抑える、お前は3人で先に向こうを落とせ！」
順平さんが苦戦しながらも俺に言つ…くそつ…相手に隙を作れれば…順平さんを一人放つておくわけには…

『我は汝

汝は我』

「これは…！？」

『オイラはお前の心の海より出てきたホ

新しいペルソナ…順平さんを救おうと願つたときに生まれたのか…

『オイラはジャックランタン、オイラはオマエでオマエはオイラだ
ホー』

ここからの力は…宙さんのほうを見る、彼女にも俺に宿った力を感じ取れるのか頷く

「ジャックランタン！」

「ジャックフロスト！」

「ジャックブラザーズ！！」

俺達のペルソナ…雪だるまのジャックフロストとかぼちゃのジャックランタン…2体が現れシャドウに向かう…

「ヒーホー」

「ヒホヒホー」

どこからとも無く現れたマイクセット…一人が…ヒホヒホ騒ぎ出す
「か、可愛い…」

支援の風花さんが思わず言葉を漏らす…確かに妙に愛嬌あるなあ…
ジャックフロストってJOJOのキャラのぬいぐるみで見たことがあるし…

敵のシャドウはあっけに取られている…

「順平、真田さん、今のうち！」

俺は一緒に動きの止まった一人に声をかける、そう、この2体が揃うとシャドウさえも気を逸らされる…

「おう…」

「任せておけ！」

とは言つても何度も通じる手段ではない…が…

「このチャンスを逃しちゃ駄目よ！総攻撃開始！！！」

リーダーである宙さんの号令で俺も剣を構えジャックブラザーズにより出来た隙を付きいつきに攻勢をかける…いける…

「順平さん…」

「おう、行くぞ…！」

最後に順平さんと同時に攻撃を仕掛けシャドウに止めをさす…よつ

し、終わった！！

大型のシャドウを2体倒した… 今日のところはこれ以上出でこないようだ。

風花さんは影時間に10日分居たのに力を使つたせいで氣力を使い果たしたのであらう、その場で倒れる。

先ほど乱入してきた森山さんは風花さんを心配しているようだ。

いじめを行つていたと聞いたが本当に反省しているんだろう…

彼女はペルソナ使いではないためここでの記憶は忘れるらしいが…

これを見る限り心配なさそうだな。

ひとまず事件解決、これで一安心かな。

SIDE 有里 宙

事件は解決した。それに満月の夜に事件が起ころうという事実、私はこれを見つけていた。

正確にいうと知らされていた。私の部屋で影時間に訪れる謎の少年が『満月の晩に試練がある』と警告を受けている。

それに鳴上君は夢で仮面の人物と会つたのがきっかけで複数のペルソナを操る力を得たらしい。

会つた人物は違うが私もペルベットルームに夢の中で招かれた。

ペルソナとは心の力、何か関係あるのかな… もしかしたらあの少年も私の夢に出てきてる?

彼と会っていると起きていたなんて保証はどこにも無い、客観的事実無いからね。

まだまだ謎は残されているなあ…

とりあえず?をあげたあと必死に書き上げました。

前のあとがきで書いた私のやりたかったことは「一人のワイルドのペルソナ使いによるミックスレイドです。

一人で複数のペルソナを同時召喚するより「一人のキャラで放つほうがかっこいいんじゃないか」と思つたんです。せつかくワイルドの能力者が一人居ることですしね。

当初はペルソナ4編までミックスレイドのネタは温存しようかとも思つたのですが我慢できませんでした…そこまで続けることが出来るのか、ペルソナ4編を書くかどうかもわからないですし…

まあ、この理論で行くともしこれがP4編まで続いた場合相棒や恋人候補の女の子たちを差し置いて完一のタケミカヅチと雷神演舞を放つことになりますが(笑)

そしてやっぱり最初はオルフェウスの出番でしょうとすると女教皇のアルカナのアプサラスになったわけです。風花とまだそこまで親しくないのに使えたのはちょっと強引かなとも思います、そこは筆者の未熟さです。

ではここまで読んでいただきありがとうございました。

ご意見、感想をいただけると嬉しいです。

今回は特にミックスレイドの件でオリジナル要素を出してしまったので意見はいただきたいです。

一区切り付いたので今後少し更新ペースは遅くなります。

6月11日（前書き）

今回はすこしく短いです。

大きなイベントまでは日常的な短編が続くと思います。

6月11日

SHIDE 鳴上 悠

作戦は終わったがあのときの疲労で風花さんは昨日までは入院していた。

知った上で自ら完全に制御してペルソナを出したわけでなく突発的な事態で召喚を行つたので普通よりも負担が大きかつたんだろうと言つ話だ。宙さんも最初に召喚した時はしばらく寝込んだらしい。だがあれから3日、どうやら回復したらしい、そのことで話があるということで今日は作戦室に呼び出されている。

そして作戦室、俺達の他に風花さんと寒い大人こと理事長の幾月さんが揃つていた。

どうやら順調に回復しているようだな、あの時と比べて顔色も良い。まずはあの時居なかつた幾月さんと風花さんとの挨拶から始まる。昏倒事件の犠牲者たちが無事と言つことの報告を受け、そしていよいよ本題に入る。

桐条先輩、真田先輩は相変わらず熱心なオファーだ。対照的にゆかりさんは無理しないで自分の意思でと言つている、

「オマエが入るときも中での意見はこんなもんだつたぜ。」

と順平さんに耳打ちされる。

「私やります、やらせてください。」

即答してますね、まあ俺も答えを出したのは遅い時期だつたが決めたのはわりと早かったけど。

入寮に關しても問題ないらしい。学園から御両親への説明も俺という実績あるしな。

「同じ学年だし女同士だし仲良くやうつね。」

「はい、よろしくお願ひします。」

2年組みは女3人に順平さんだけ男、肩身狭そうだな…
女性率が高いし…部長は桐条さん、リーダーは宙さん…男の発言力
弱いよね…

そして次の議題は満月について、研究者としての立場から幾月さんは真田さんの仮説…満月の夜に大型シャドウが出るところ説が正しい…といふ。

来月以降の指針となるだろ？ 常に緊張状態より決戦日が分かっている…といふのはやりやすい。

「うーん、ゆかりッチとは対照的…清楚でおしとやか…いいねー、新しいタイプの投入！」

風花さんが帰ったあと（入寮が決まつたとしても引越しはまだなので）順平さんが喜びの声を上げる。

「今までςカツラーメンか、鳴上の手料理だけだったが食生活変わるものよ？」

現状で風花さんが料理が出来るかどうかは確定していないと思うが…「なに言つてるんだ、鳴上、ああいうタイプは料理できるんだよ、俺には分かる。」

「へー、じゃあ順平はもう鳴上君の料理は食べないってことで良いのかな？」

「いやいや、それとこれは話が別だろ、鳴上の作るメシ美味しいし…でも実際に俺の料理の負担が減ると良いんだが…

それが…惨劇の始まりとは…このときは想像もしていなかった…

6月11日（後書き）

作戦日が終わって風花仲間に加入イベントと日常の一コマ。これを書くために平行してP3Pもやっていて順平との会話から最後のを膨らませました。ゲームは前の周回でベス様を倒したデータなので本当にこの作品のためだけに進めているデータなんですが。まあ、ここからはのんびりペースで更新していきます。では読んでいただきありがとうございました。

ご意見、感想をいただけると嬉しいです。

最近アクセス数やお気に入り登録数が増えててすゞく嬉しいです。

俺は…俺達は予想外のところで最大の危機を迎えていた。

発端は簡単、6月12日、風花さん引越しのための部屋の準備、使われていない部屋だったので掃除を行った。しかしこのとき女子の部屋と書つことで俺と真田さん、順平さんは立ち入らせてもらえないかった。

6月13日、俺は前日に活躍できなかつた分風花さんの歓迎のために手料理を振舞つた。

そのときに順平さんが言つてしまつたのだ、禁断の言葉…『女子の手料理が食べたい』と…

そして本日、6月14日、桐条さんは不参加だが…宙さん、ゆかりさん、風花さん、3人がそれぞれ料理をした…

そして料理を持つてきたときの宙さんの恐怖に染まつた表情とゆかりさん、風花さんの自信ありげな表情。

宙さん以外の料理から立ち上る恐ろしげな妖気…俺達…俺、真田さん、順平さん、そして普段は居ないのに運悪く（とつねつとも風花さん入寮だからだろうが）居合わせた幾月さん…

「順平、待ち望んでいた女子の手料理だ、遠慮することはないぞ。恐怖に駆られた真田さんが口を開く。

「いやいや、昨日料理振舞つたのは鳴上だろ、まづはお前から行くべきだ。」

順平さん、俺に押し付ける気か！？

「いえ、年長者より先に手を付けるわけにいきません、幾月さん、

「どうだ。」

俺はまだ死にたくない。

「僕はここに来る前に食事取つてきただからね、真田君、遠慮する」とは無いよ。」

平然と嘘をつつき逃げようとする…互いに牽制をしあい誰も手を付けてない…

これをマドオン料理などと呼ぶのは甘い…マドなら闇態勢のあるペルソナで挑めば良い。ただの即死ならホムンクルスを準備すれば良い。

なんていうか…これは見ただけで恐怖を訴え食せば万能属性即死効果、防ぐ手段なしつて感じがする。

「どうしたんですか？遠慮せずにどうぞ」

邪氣の無い笑顔が怖い…味見したんでしょうか…？

「「めん、私には助ける手段は無い。」

いや、宙さん、助けてください。

「順平、あんたが望んだんだからいい加減食べたら？」

…これは殺人事件になるのではないか…

「そ、そうだ、真田さん、この料理から逃げるんですか？」

膠着状態に陥つた俺たちに順平さんが言つ…

「逃げるだと？俺はどんな敵からも逃げん！」

勇者だ…まあ大魔王クラスのこの手料理からは逃げれ無さうだが…大魔王からは逃げられない、この事実を前に俺も覚悟を決めた、食べずに済ませることは無理そうだし…

「それじゃあ…平等にみんなで一斉に逝きましょ。」

「鳴上君、その漢字は…嫌な感じなんだけど…」

寒い洒落にかまう余裕も無い、それに誤字ではないと思つ…

俺達は全員一斉に料理に手を付ける…

生は真実、片時も夢ならず。
もとより誰もが知る…

真実とは選び取るも…

はつ、今一瞬青い部屋が見えた！？しかも台詞は今見るのは早い
気がする…何を言つてるんだ、俺はあまりのショックで錯乱したの
か！？

周囲を見ると地返しの玉を取り出す宙さんと倒れている他の男3人…
そして謝罪する風花さんとゆかりさんが居た…

恐ろしい敵と共に戦う連帯感で俺たち男達の連帯感が高まつた気が
する…

そしてその日から…順平さんが風花さんとゆかりさんの料理を食べ
たいと口にすることは無くなつた。

ちなみに宙さんの料理は普通に食べられました。

ギャグ系の短編です。

ペルソナはたまには日常物も挟まなくてはと思いますね。

しかしひペルソナシリーズの女の子はなんで料理苦手設定の子が多い
んでしょうね…ペルソナ2の舞耶ねえも家事できない設定でしたし
…3や4は言うまでもないですしね…

宙に関しては女主人公はお菓子は作れだし、料理は人並みに出来る
設定です。

ちなみに今回イゴつたのはただのネタです。言葉は動画サイトから
探した4のを引用、今の鳴上がこれを見るはずは無いのですがギャ
グと思って流してください。

ではここまで読んでくださいありがとうございました。

ご意見、感想を頂けると嬉しいです。

SIDE 有里 宙

昨日の事件で犠牲者が出たせいなのかは分からぬけど風花が作った料理部に私も所属することになった。

本当は私が考えていることのために風花の力が必須だから訪ねたんだけど…

とりあえず結果的には風花の協力の約束は取り付けた。それに今後のために風花に料理くらい覚えてもらつたほうがよさそうだし、これ以上犠牲者が出るのも困るしね…（試食は慎重に…私が次の犠牲者にはなりたくないし…）

総合的には結果はバツチリ、次は美鶴先輩にも話しないと

「なるほど、君は随分鳴上を高く買つているな。」

「試用期間も兼ねてつてところですね。だからしばらくは美鶴先輩と真田先輩にもサポートしてもらつて」

「分かった、引き受けよう。」

手回し完了つと、デメリットはあるがそれ以上に得るものもあるはずだ。さてそれじゃあ早速今夜タルタロスに行かないとね。

本日のタルタロス探索は妙なことになつていた。

桐条さんがナビ役を交代することになつて戦闘班の人数は6人、そしてサポート能力の高い風花さんの加入、それに対しても

「本日より探索班は二つに分かれて行動します。」

というリーダーの一言により俺達は二つに分かれることになつた。チーム編成は2年生チーム、つまり宙さんをリーダーとしたゆかりさん、順平さんのチーム、そして俺のほうは真田さんと桐条さんのチームだ。

最初は順平さんがもう一組のチームリーダーになろうとしたが…2年生チームのリーダーは勿論宙さん、そしてリーダー役になるのならこちらの誰かと交代と言うことになる。しかし…順平さんも真田さんや桐条さん相手にリーダーやるとは言い出しちぎりこよつだ。俺と交代するとは言い出さなかつた。

そして俺は真田さん、桐条さんとともに探索を行つことになつた。

「鳴上、君が私たちを指揮してくれないか?」

…聞き間違えかと思つたがどうやら現実のようだ…

「有里から提案はあつたがな、それに加えて実際君の戦い方を見て思つた。君もリーダーとしての資質はあると思つ。」

「えつと、どうこうことです?」

寝耳に水というやつだ。経験もあり年上の二人を差し置いて俺がこちらのチームの戦闘指揮?

「君は常に敵味方全体を見て戦闘を行つてゐる。それに加えて君自

身も複数のペルソナを状況に応じて使いこなすことが出来る。」「

確かに、俺のペルソナも新たに生まれることもあり、他の人には把握しきれない。指揮されるより自分の判断で戦つたほうがやりやすい。

「俺もそう思うな、悠になら任せられたしそのほうが俺も戦闘に集中しやすい。」「

ちなみに昨日の事件で連帯感が高まつたのか真田さんは俺を悠と呼ぶようになった。

「でもなんでこのメンバーで俺なんですか？」
他の人が入る前から戦っていた経験豊富な一人だ、俺が指揮して良いのか疑問に思える。

「このメンバーならではだ。私達なら君がミスした場合のフォローにも回れる。それに何より伊織が君がリーダーとなつたら納得はないだろうからな。伊織や岳羽にはまだ伝えていない。」「

確かに…順平さんはリーダーと言う立場に成りたがっているし…「つまり今後のために俺と美鶴がお前を鍛えるという意図もこめてこの編成だ。有里もよく考えている。」「

「わかりました。未熟なりに俺も戦闘指揮をずっと宙さんだけに任せることにいきませんし、訓練だと思ってやってみます。」「

『がんばってね、鳴上君、私もここからサポートするからどうやら風花さんにも手回し済みらしい、そりやサポートや国は秘密には出来ないだろうけど。

『我は汝 汝は我

汝の新たな絆により我ら汝の心の海より呼び出された』

『我は妖精達を統べる王、オベロン。』

『私は妖精の女王、ティターニア』

新しいペルソナ… 真田さんと桐条さんとの間から生まれたのか…

「よろしくお願ひします、明彦さん、美鶴さん」

俺は真田さんに習い彼らを名前で呼ぶことにした。

SIDE 有里 宙

合流した3人を見て私は作戦が上手く行つた事を悟つた。

6人でぞろぞろ戦うのもきついし、部隊を二つに分けることを考えた。

そしてリーダーを任せられるのは順平には悪いが鳴上君と思つていた。

理由として表向きの理由としてあげた彼のワイルドの力、常に戦況を見て行動する戦闘センスなどもある。

だが何よりの理由として前にイゴールが言つたこと。『彼は本来ならまだ力を目覚める運命ではなかつたのでしょう。いずれここのお客になりえるかもしれませんが今はまだそのときではありません。』という言葉… もしかして彼はこの件とは別の事件… 別の戦いに身を投じるかもしれない。そのときに私が居るのかはわからない。それに備えて彼に経験を積ませておこうと言う意図もある。

と言つても問題は山積みだよね… 順平が知つたら確實に嫉妬するよ… ゆかりの場合は彼や風花が戦闘に参加することに未だに不信感持つてるし…

パーティ一分割を今後するかもという意図のもと組み上げた話です。さすがにコンセントレイト、テンタラフーやあと一撃で倒せるのにタルンダ使う人に指示されたくは無いです（笑）

さてティタニアに関してですが3では恋愛のアルカナ、4では女帝のアルカナなんですね。今回は女帝のアルカナ扱い、美鶴との縁により生み出されました。

コミュに関しては女主にとって真田は星なんですがペルソナのアルカナは皇帝、だから真田との縁によって皇帝アルカナのオベロンが生まれました。

まあ、最大の理由は真田と美鶴という二人の人物との縁により組み合わせとなるペルソナを出したかったんですよね。ミックスレイド、真夏の夜の夢は使えなくなりましたが。

ではここまで読んでくださってありがとうございました。
ご意見、感想をいただけると嬉しいです。

SIDE 有里 宙

私は今日は鳴上君の釣りに付き合いながら色々と話をして過ごすことにしていた。

空いてる時間つてあんまり無いんだよねえ。

「それで、この前のタルタロスの件ですが、なんで俺をリーダーにしようと思つたんですか？順平さんなら喜んでやつたでしょ？」

「美鶴先輩に聞いてない？」

「聞いたけどまだ納得いきませんよ。戦い方のセンス以前にまだパーティーを分ける必要性が感じられません、もう2、3人いたら別でしょ？」

まあ、確かに「デメリットとしての一つのパーティー3人体制は危険も多い。

でも5人や6人で戦うのはちょっと多いと思つんだよね、4人がベストだと思う。

「まあ、若い子に経験を積ませようと思つてるだけだよ。」

「そこまで年齢離れていないでしょ？」「…

ちつ、誤魔化してくれない…

「わかったわよ、まだみんなには内緒だけどね。」

まあ、彼の今後の経験のためつて言うのはベルベットルームという私にしか見えない場所での情報をもとにした推測でしかない。だからもう一個の問題を彼にも解決を手伝つてもらおう。

「まあ、人間関係の問題もあるでしょ。」

つまりゆかりと美鶴先輩の間の壁、順平の自己顯示欲、それに2年、

3年間にまだ壁があると思う。

「でも一緒に活動しないと馴染むのも馴染まないと思いますが…」「確かにそうなんだけどね…でもゆかりがまだ何か抱えてそういうんだよね。その辺上手く聞き出せないものかなあって思つてるのよ。彼女の家庭事情なども少しづつ聞いているけど…戦う理由としてまだ何か抱えてるような気がするのよね、あの子…」

「順平に関してはあいつが自分で解決しないといけないと思う。私がリーダーであることも不満そうだし…。私たちの場合シャドウのほかにも内部の人間関係にも気をつけないといけないのよ。」

「結局内部の人間関係を解決するための時間稼ぎ、タルタロス内部で揉めないようにととりあえず分けたつてことですか？」

「まあ、ぞろぞろ大人数で戦つても戦闘経験は得られないし。今後のことを色々考えたらそれが良いと思ったのよ。最善策ではないかも知れないけど…」

勘だけどここ数日のペルソナ使いの発見具合を考えるとまだ人数増えるかも知れないし

「さて、それじゃあここまで聞いたからには君にも協力してもらわよ。」

「え…？協力って何を…？」

「そうだねえ…ゆかりを口説いて悩みを聞きだすとか…」

ゆかりは理想高そうだけど彼ならいけそうな予感もする。順平は黙りつぽいし真田先輩は天然だし…

「ちょ、ちょっと無理ですよ。それにそういう目的で女性を口説くとか…」

「あはは、それは冗談としてもゆかりと仲良くなつてくれると君のペルソナも増えるだろうし、良いこと尽くめだよ。利害関係抜きであの子は良い子だと思うし。それとも年上は射程圏外かな？」

「そんなことは無いですが…」

「ま、君も仲良くなつてくれると嬉しいよ、ここつてけつこう人間関係複雑だからね、私と君とて緩衝材になつて状況よくして行こう

よ。
」

「分かりました…努力はします。」

彼はわりと誰とでも仲良くなれるタイプだし…状況改善になってくれるとありがたいな。

番外編 愚者？（後書き）

おまけ

「お前の守備範囲は小学生から老女までだろ。」

2年後、相棒からの言葉

今回はなかなか執筆が乗らなかつたです……出来もイマイチですし……
次回の満月までに数回番外編を挟みたいんですけど……ちょっと更新
滞りがちになるかもしれません。
では読んでいただきありがとうございました。

SIDE 鳴上 悠

前回の作戦日の後、何度もタルタロスにも潜り風花さんもこの寮に馴染んできたようだ。

俺は学生の悲しさ、そろそろ外食ばかりをするわけにもいかず自分の食事は自分で作ことが多い生活を送っている。（他の住人が食事をねだる場合は材料費と引き換えに作ることにしているが）ただ俺が食事の準備をしていると風花さんが俺に視線を向けていることが多い。

しかし前の経験からその風花さんに声をかける勇気は無い…彼女に協力を求めるとは惨劇再びという感じしかしないからな…

「ねえ、鳴上君。」

俺は声を掛けられたときタルタロスで死神が出たときのような戦慄を感じた。

「な、何か御用でしようか？」

目の端に自分の部屋に逃げていく真田さんと順平さんの姿が見えた

…俺を見捨てるとは…しばらくあの一人の食事は作らない…

「私にも料理手伝わせてくれないかな？」

ここでYesと言えるほど俺の勇気は高くない、しかしNoと言つても勇氣いるよ、これ、俺はどうすれば…

「私最近料理部を作つて宙ちゃんにも教わつてているんだ。」

俺が聞いた話ではまだ成功例は無いはずだ…

「年上の方に手伝つてもうわけに行きませんし…俺一人で大丈夫です。」

むしろ助けてください…

「あ、それじゃあ私に料理教えてくれないかな?」

…「これはどう取るべきだろ?…今後を考えると彼女の料理が上達することは良いことだ。」

ただし味見という名の死亡フラグの可能性もある。しかし…

「まだ俺には人に教えるほどの腕はありませんよ?本を見て少しづつ自己流で覚えていつただけです。」

そう、俺は必要に迫られて多少料理に慣れているという程度、人様に教えられるほどの腕はない。

「そつか…じゃあ私がんばって料理覚えるから味見してくれない?」

「わかりました、料理を教えましょう。」

俺は即答していた。死亡確率は下げたいし…

そう考えながらも俺には死亡フラグ回避の良いアイディアも浮かんだ。

「俺は今日は自分の分は用意はしますので…外食の多い順平さんと真田さんに味見をお願いしましょう。」

見捨てて逃げた復讐も兼ねて…そして俺自身は回避しつつ、彼女の料理の危険度を自分の目で確かめよう。

その日…巖戸台分寮に犠牲者が一人でて、今日のタルタロス行きは中止となつた。

今後も俺は自分の食事は常に確保できるようにして少しづつ彼女の料理の上達に協力できると良いな…俺自身の命のためにも…

番外編 女教皇？（後書き）

すみません、ちょっとスランプ気味、この短い期間に風花の料理ネタを再び使ってしました。

番外編を少し続けると言つていましたが調子を取り戻すためにも本編を進めて時間を流れさせようと思います。

楽しみにしていただいている方には大変申し訳なく思いますがもう少しお待ちください。

ではここまで読んでいただきありがとうございました。

6月20日

SIDE 鳴上 悠

今日は理事長が来るので寮に早めに集まる用に言われている…どうやら先日の料理のトラウマから肉体も精神も復帰したらしい。寮に帰ると2年の女性3人が寮の前で犬と戯れていた。

「コロちゃん、お手」

「ワン」

お、賢いな、俺も犬と過ごしたい…

「あ、おかえりー」

「ワン」

コロマルといつらじこ

犬も俺に挨拶とばかりに寄つてくる、可愛い…

そういうえば前に噂話を聞いたことがある…

神社の神主さんの飼い犬だったが神主さんがなくなつたあとも自分で散歩コースを歩いているらしい。

それ以外は神社のところを守つている忠犬だと

…そんな話を思いだしていると通りすがりのおばさんと女性陣が話を始めたので俺はその間犬を撫でて過ごす事にした…やはり動物は良いな…

「鳴上君、今日は理事長が来るらしいからそろそろ寮に入ろうっ?」

「もう少しだけ…コロマルと遊ばせてください!」

別れを惜しむ俺だったが無常にも寮に引きずられた。たつた30分ほどもう少しを繰り返しただけなのに…

理事長が来た用件は満月に出るシャドウに関することだった。

さすがは研究者と言つことか…

話をまとめるにシャドウは12の分類に分かれている。

タルタロスに出ているのもそうだな。

『魔術師』『女教皇』『皇帝』『女帝』『法王』『恋愛』『戦車』
『正義』『隠者』『運命』『剛毅』『刑死者』

今まで倒した大型シャドウ（俺が関わってないのも含め）倒したシャドウが分類上は『魔術師』『女教皇』『皇帝』『女帝』に分類されているらしい。つまりノン一二三四。

つまり大型シャドウは全部で12体居て残りが8体。

シャドウが何のために人間を襲うのかなどとまだ謎のことも多いが大型シャドウが残り8体というのは大きな前進だろう。

まだ多いようにも感じるが1／3を倒したと思えば割と気楽な気がする。もっとも俺が戦つたのは2体だけだけど…

と言つても敵も強くなっている…俺達もタルタロスの探索進めて力付けないとなあ…

6月20日（後書き）

「ロロマル登場の回です。

番長は一日猫と過ごすほどの動物好き、その対象は猫は勿論、犬、狐、クマ、どれも受け入れる人です。

理事長との話はただの説明なので長々と書いても本編そのままになるので大幅にカット、結果として話自体が短くなってしましましたが…

ではここまで読んでくださってありがとうございました。

7月7日? FULLE MOON (前書き)

時間が飛びました、スタンダード攻撃を受けたわけではないのです…

SIDE 鳴上 悠

最近は表向き平穏な日々が続いている。

しかし世間では復讐代行サイトと言うものが流行っているらしい。俺はネットをやらないので詳しく知らないのだが…ネットに詳しい風花さんに調査を頼もうと思つたらタイミングが悪かつたようで、ゆかりさんが何か依頼していたみたいだつたので控えるといつこともあつたが…まあ、あれから数日経つたが復讐代行サイトとやらの被害者らしい事件も起こつてないようなので問題ないだろう。

そして迎えたのは7月7日、満月だ。

俺達の仮説が正しいのなら今日は大型シャドウが出る日だ。
早めに寮に帰り影時間を持つことにした。

影時間…風花さんのペルソナ『ルキア』が周囲を探る。探索型のペルソナって便利だな…

結果としてシャドウの反応は見つかった。

白河通り…そう言えば最近あの辺りでカッブルで影人間が見つかるという話を聞いている。独り者の俺でもリア充が影人間になろうと爆発しようとしたことか…とは言えない立場なんだよな…

しかしこれで満月の夜つて言う仮説は立証されたつてことだよな。
「白河通りってどんなトコだつたつけ?私あまり行かないから」

風花さんは知らないのか?

「あ、そっか、ホテルんとこだこか。だから、二人一組なわけね。」

まあ、俺も行つたことはないんだけど…幾月さんは行つたことがあ
るようなことを言つてはいる、内装が凝つてただけとは言つてはるが…
間違いなくそういうホテルだよな。

「私も行つたことないから見物するの楽しみだなー。」

「私は嫌な予感しかしないわよ…」

宙さんは楽しそうに、ゆかりさんは嫌そうに発言する。

「ゆかりッチ、子供なんだから。」

あーあ…順平さんはまた無駄に挑発を…

「だつて宙ッチは楽しそうじやん。」

「そういうこと言つ順平のほうが子供じゃない。そんなこと言つな
ら私は今回前線で戦うからね。」

「え？ 予約制なの？ っていうかむしろ全員で戦えば良いんじゃない
？」

「いや、こざと並つときのために戦闘能力の無い山岸の護衛は必要
だ。」

え？ もしかして俺そつち？ 出来れば俺も前線に出たいんだけど…

「メンバーの人選は有里に任せよ。」

「了解、現場行つて考えますよ。」

好奇心的にもホテルの内装は見てみたいし…

「俺も前線で良いですか？ 俺はまだ大型シャドウとの経験少ないん
で参加したいんですけど。」

それに対してもしばらく考えるようになつて…

「じゃ、鳴上君とゆかりは決定ね。あと一人くらいかなー。」

ということで本日の作戦は始まった。別働隊に戦闘の可能性が少な
いから今回はOKと向かう途中に言われた。

実際に戦闘確立が高い場合は俺を別働隊にするという「」といじい。
とつあえず今回は俺も前線だ。張り切つていこう。

満月まで時間が飛びました。

この時期のイベントつてストレガとか風花とゆかりとか真田と荒垣とかで主人公の知らないところで進む小イベントばかりなんですね。

鳴上が介入するようなイベントにも思えませんし大きく飛ばしました。

日曜日には神社で天田君とは会えますが…別に必要なんだろうと思つてイベント起きてません。

だから思い切つて時間飛ばしてしまいました。
満月編は数回に分けて行きます、出来るだけ早くアップしようと思つています。

ではここまで読んでいただきありがとうございました。

SHIDE 鳴上 悠

結局今回の戦闘チームは宙さん、ゆかりさん、美鶴さん、俺、女性の中に俺が紛れる形となつた。

今回の一人一組の影人間という特性上なのか男が入るのを最小限にしたということだ。

順平さんも真田さんも不満そうだったがリーダーの決定には逆らえない。

ホテル・シャン・ド・フルールの内部は影時間っぽく赤いシミとかも見える不気味なものなので雰囲気とかはありはしない。しかし通路にある象徴化した棺おけも一つ並んでおいてあることからこのホテルの用途は分かると言うものだが。

とりあえず反応のあつた客室、3階の大きな部屋に向かひこんじた。

大きな部屋に居た大型シャドウは近くに十字架のようなものを置いた太ったタイプのシャドウ。今回の事件の内容から想像するようなほど変なのではないように見える。

『敵、法王タイプです。気をつけて』

法王か。名前的には今回の事件にあまりあわないような気もするな…

「風花、とりあえず分析、みんなは敵の分析済むまではあまり無理な攻撃しかけないように。」

宙さんの指示に従い俺はまずは援護魔法を使うことにする。ペルソナはセイメイ、じついう時弱点がないペルソナを着けておくと安定期する。

「ラクカジャ」

今回のフォーメーションでは俺とゆかりさんが後衛で援護。無理に剣で攻撃せずにペルソナで援護するポジションだ。

宙さんは頑丈なタイプのペルソナを下ろして前衛、美鶴さんもそれを補助する程度に前というポジションだ。

女性の後ろと言つるのは格好がつかないが適材適所と言つものだ、俺が援護して負担を減らせれば良い。

「アレス！」

宙さんが今回メインに使うのは戦車のアルカナのペルソナ、アレスだ。順平さんが居ないこのパーティーでは物理能力は低め、俺も物理が得意なペルソナは持つてないしな。

『解析しました。電撃属性、光、闇属性は通じません。』

大型シャドウ…というよりタルタロス内も含めてボスクラスの大型のシャドウには光、闇はまず通じない。食らうと一撃で倒れる魔法が光、闇の魔法の特長だ、そう簡単には終わらないってことだろうな。

「明彦を連れてこなくて正解だな。」

確かに、真田さんのペルソナは電撃属性と低下系魔法、こいつが相手となると直接殴るか低下系かという選択になる。

「鳴上君、回復は私がやるから鳴上君は援護、それが終わったら攻撃に回つて。」

「わかりました。」

俺は強化魔法で前衛を固めた後に攻撃に回る、満さんの魔法攻撃、宙さんの物理、このフォーメーションなら…わりと優位に戦闘を進めていたところでの油断がいけなかつた。

『マハジオンガ！』

強力な電撃魔法を放たれる！俺は魔法耐性はわりとあるが電撃に弱いゆかりさんは吹き飛び体勢を崩す！？

『滅亡の予言』

な…敵への恐怖心が芽生える…動けない…やばい…このままでは…

「パワー！メパトラ！」

宙さんの魔法…身体が動く！

「セイメイ！メディア」

俺は回復魔法で態勢を立て直す。

「鳴上君、助かつたよ、俺が回復魔法にまわり余裕が出たのでゆかりさんも態勢を立て直す。」

「よし、いけるな！」

俺達の状態を見て美鶴さんも回復にまわるか否かを判断し、結果として攻撃を続ける。

「ペントレシア！」

美鶴さんのペントレシア（舌噛みそうな名前多いよな…）が氷結を放ち、敵は凍結状態…チャンス！
そこに攻撃を加え体勢を崩す！

「よし、一斉に攻撃をするぞ！」

俺達はその隙を逃さないとばかりに攻撃を加える！

『敵シャドウ、消滅しました』

よし…思つたより大したことなかつたな

『お疲れ様でした。今回も無事に倒せてよかったです。これから待つてます。帰還してください。』

「今回は楽勝だつたね。」

「ああ、戦闘バランスも悪くないしな」

「いつそのこともうこのメンバー固定で良いんじゃないですか？」

女性陣も軽口を叩きあつてこむ。

「あれ？扉が開かないよ。」

外に出ようとした宙さんが言つ。

『…そんな…なぜ』

風花さんとの中継は繋がつてているようだな。

『部屋にまだシャドウの反応があります。さつき倒したのとは別のシャドウです。』

楽勝だと思つたら今夜も2体居たか…風花さんはサーチを開始し俺

達も部屋を調べることにした。

「あれ…？この鏡なんか変じやない？」

とこつゆかりちゃんの言葉を最後に…俺の意識は遠くなつていった…

7月7日? FULL MOON (後書き)

今回は法王戦までです。

7月7日はまだ続きます。

しかし戦闘描写をうまく書ける人は尊敬できますよね。
ではここまで読んでいただきありがとうございました。
次回更新は明後日を予定しています。

SHDE 鳴上 悠

俺は見覚えの無い部屋に居た。おそらくはホテルの一室だろう。
しかしながら俺がここに居るのか、何があったのかが思い出せない
…頭に靄がかかっているようだ。

思い出そうとしたが思考が定まらない… そうしているとバスルーム
からシャワーの音が聞こえてくる…
…シャワー使うよつたな状況だつたか? そもそも影時間だつた気が…
影時間ではシャワーつて使えるのか…?

『享樂せよ…』

頭に声がよぎる…

『我、汝が心の声なり… 今を享樂せよ』

思考がより鈍つていくような気がする… 考えが定まらない…

『見えるものは幻… 形ある”今”だけが眞実…』

…そんなものなのか…?

『未来など幻想、記憶など虚構… 欲するまま、束縛から解き放たれ
よ… 汝、それを望むものなり…』

よくわからぬ… このまま流されると何があるんだ…

『汝、真に求めるは快樂なり…』

それはちょっと違う気もするが…
シャワーの音が鳴り止んだ…

『な… 君』

ん…? 声が…?

『鳴上君、聞こえる?』

風花さんの通信…？ そうだ、俺は法王の大型シャドウを倒したあと
気が遠くなつて…

「はい、聞こえます、いつたい何があつたんですか？」

『リーダーが敵の呪縛を打ち破つたので通信も回復しました。 そち
らは大丈夫ですか？』

風花さんと話しているとバスルームの扉が開く…そこにはバスタオ
ルのみを羽織つたゆかりさんが…

「…………」

『鳴上君？ あとそつちにゆかりちゃんもいるはずなんだけど？ 聞こ
えてる？』

「キヤーーーー！」

次の瞬間俺の頬に激痛が走つた…

「「」「めんね、鳴上君、大丈夫？」

「あ、平氣です…あの時点で正氣を取り戻せたのは不幸中の幸いで
したね。」

あの状態だからセーフ、下手したら殺されてた可能性もあつたわけ
だし…

服を着たゆかりさんと一緒にリーダーたちと合流しようと俺達は部
屋を出た。

「ゆかりー、鳴上君ー、無事ー？」

俺達が居た部屋は2階だつたらしい、階段から宙さんと美鶴さんが
上ってきた。

「あ、宙、桐条先輩」

「無事みたいだね？ 何事もなかつた？」

「何にも無かつたから…」

そんなに強調すると余計に怪しく見えると思ひます…といふかそち

らは女性同士で何があつたんでしょうか…と思つがそんなことを聞くほどの勇気は俺には無い。

「由さん、敵の精神攻撃を打ち払つたみたいで」これからも助かりました。

「そつかー、もつりょいのんびりしても良かつたかなー、じつちはどうせ女同士だし。」

「有里、そんなことを気軽に言つ状況ではないだろ。」

「そりよ、由、ふざけたこと言つてないで。」

「ははは、まあ最後までいつたら影人間になつたかもしれないしね。」

「しゃれにならないうちを言つておられる…それから数分間口論が続いた…

一段落付いたところで状況を整理することにした。

先ほどのシャドウは前居た部屋に居るらしいがどうやら結界を張つていらしくて近寄れないようだ。

口論の間に風花さんが分析したらしくこのホテル内の鏡に何か仕掛けがあるようだ。

「そういえばあの時、鏡が変だつた気が…あれ、なんでそう思つたんだっけ？」

ゆかりさんが疑問を口にする…俺は良く見てなかつたからなあ

「あそこの鏡には私たちの姿が映つて無かつたよ。」

「有里、よく気が付いたな。」

「じつこの鏡は自分たちが映らないか、それとも存在しないものが映るかの一択ですよ。」

なるほど…確かに約束だ…

俺達は部屋を一つ一つ調べて姿が映らない鏡を探して叩き壊すことになった。

結界を構成してる鏡を割り先ほどと同じ部屋に来た。

今回はハートに羽と顔が生えたようなシャドウだ、法王のシャドウとペアではあるだろうがこっちが主犯だつたんだろう。

『このシャドウが精神攻撃の元凶です！』

ああ、一部の仲間から殺意の波動すら感じる…

「風花、毎度のごとく分析よろしくー」

光と闇が聞かない以外は耐性は普通…って俺と同じじゃないか、これじゃ…まあよくあるタイプなんだよな…多分

「鳴上君攻撃力強化お願ひ！」

うわ…精神攻撃を恨んでるな、ゆかりさん…逆らうのも怖いので…

「セイメイ、タルカジャ」

俺は大人しく従うこと…

「ゆかり、慎重にね」

「わかつてるわよ、イオ！」

ある意味激昂状態かも…物理じゃなくてガルで攻撃はしてるけど…敵のマハラギオンは強烈だが俺が回復にもまわればなんとかなるし…プリンパなどの精神攻撃を食らっても即座に癒せる状態だ…厄介なのはマリンカリンによる魅了攻撃…これを食らうと味方に攻撃することになるがそれもしっかりと宙さんが準備してあつたディスクチャームを使えば即座に治せる。

「イオ、ガルーラ！！」

怒りに燃えて攻撃するゆかりさんを他3人でフォローする形だが戦闘は優勢に進む。

こここの程度ならタルタロスにたまに居るボスクラスのシャドウのほうが手強い…

「とじめ…」

最後は自分の手でとばかりにゆかりさんが放った弓矢でシャドウは落ちる…精神攻撃が得意ゆえか戦闘能力は大したことなかった。もつとも宙さんがその精神攻撃を打ち破らなければ俺達は影人間になっていたところだつたが…

「お疲れ様でした。」

俺達は待機組と合流した。

「トリックキーな敵だつたが、助かつた。山岸と有里君らのおかげだ。」

「たしかにな、打ち破つたあと風花さんのフォローがあつたから俺も正気に戻れた。」

「俺は暴れたり無いくらいだ。」

出撃できなかつた真田さんは少し不満そうだが大型シャドウが倒れて一安心と言つたところだ。

話しながら真田さんと美鶴さんは撤収していく。

「そうだ、ゆかりちゃん」

ゆかりさんと風花さんも何かこつそりと話していく。

順平さんは…

「あ、お前無理してるんじゃねーよ。」

なんか不機嫌そうだな？

「別に無理してないけど？」

「あー、そう…まー、良いんだけど」

「ちょっと、どうしたの？まーた、女にリーダー取られてつて不貞腐れてるの？」

「うつせえな！」

うーん…今回出番無かつたしな…相当不機嫌だ…

今は無理に話しかけないほうがあやしそうだ…そつとしておいた。

7月7日? FULL MOON(後書き)

はい、7月7日編終わりです。

この視点ですとあの3人組が出るのはまだまだ先ですね。
あちらに視点を切り替えるのもありなんですが、そちらはイレギュラー要素ないからそのまま書き写すだけですしね。なかなか扱いに困っています。

まあ、出番までそつとしておこうと思つてます。

ホテルの相手はゆかりにしました。誰にしようか直前まで悩んでいたんですがあまり仲良くないので（ペルソナが発生していない）ので今回はゆかりにしました。

しかしこれパーティー選択しだいで同姓同士になるんですよね…今回もそうですが…順平&真田とか嫌過ぎますね、個人的に…ではここまで読んでくださつてありがとうございました。

7月11日（前書き）

今回はほぼ原作から…カットしない理由はあとがきで

7月11日

S H D E 鳴上 悠

今日は幾月さんここ前の事件のあらましを説明していた。
そしてそこで幾月さんから話があつたようなのだが…

「待つて下さい。」

ゆかりさんから待つたゴールが入る…最近寮の雰囲気が悪い…そこ
に絡む何かだろうか

「この際なんで…桐条先輩に訊きたい事があります。」

「私に…？」

「私だけじゃないと思ひますけど、ここに来てから、ビックリの連
続で…」

「私…少し流されてきた氣がするし、だから、この際、はつきりさせたいんです。」

ゆかりさんは俺や風花さんが入る際もどちらかといつと反対派だった。

彼女なりに考えるところがあるのだろうか。

「ズバリ訊きますけど…先輩、私たちに、まだ何か言ってないんじ
やないですか？」

例えば影時間やタルタロスの事、分かんないみたいに言つてました
けど…あれつて、10年前の事故と関係があるんじゃないですか？」

10年前の事故？聞いたことないな。

「10年前のジロ…？」

順平さんも知らないようで疑問を口にする。その後視線で俺に知つ
てるかと尋ねてきたので俺は首を横に振る。

「ゆ、ゆかりちゃん…」

風花さんは知つていいようだ… 最近一人で作戦室で相談しているようだつたけど… そのことだつたのか？

「学園の周りで爆発があつて、たくさん人が死んだ話… 当時すごいコースになつた筈ですし、先輩は、知つてますよね？」

「…ああ。」

「幸い生徒は無事だつたみたいだけど、でも、何かへン。なぜかちようど同じ頃一度に何十人も不登校になつてるんです。」

爆発事故による危機感を感じた欠席つてことじやないんだろうな…

流れ的に

「…これ、偶然なんでしょうか。」

「どういう意味だ。」

「私、実は学園に残つてゐる昔の書類とか、調べたんです。そしたら、不登校なんてのは記録だけ。ホントはみんな、急に倒れて入院したつて…似てると思いませんか…？風花を苛めてた子が…入院したときと。」

「…。」

「ちゃんと説明してくください！10年前の事故…あの日、本当は何があつたんですか？」

学園は桐条グループが建てたんだから、桐条先輩は知つてははずでしょ！」

な、なんか想像より重い話になつてきたな…

「まあまあ、ゆかり落ち着いて、その剣幕じや先輩も話しくいでしょ」

宙さんが宥めようつと声をかける。

「…隠してゐる訳じやない。必要のないことは告げてないといつただ…しかし…」

まあ、桐条グループに関わる問題だ、気軽に話せるものでもないとはわかる…

「…仕方ないさ、君のせいじやない。」

」の中で唯一の大人…幾月さんが口を挟む

「…分かつた。全て話そう。

シャドウには幾つも不思議な能力がある。研究によれば、それは時間や空間にも干渉するものらしい。私達は敵と思つてゐるからあまり意識しないが、もしそれを利用できるとしたら…どうだ？なにか大きな力になるかも知れないと思わないか？」

「あー空間…というと… ドラ… もんの… ビ… もニア…とかみたいなのを作るとか？」

少しでも場の雰囲気を和らげようと苗さんはそういう例を出すが…あまり効果は無いようだ。

「君の言うのがどんな道具かは知らないが… 14年前、そう考えて実践に移した人物が居たんだ。桐条グループの先代、桐条鴻悦…私の祖父だ。

祖父はシャドウの力にいたく魅せられ…それを利用して、なにか途方も無い力を作ろうとしていたようだ。

「途方も無いもの…」

「実現のために、研究者を集めシャドウを大量に集めさせた。」
シャドウを集めた…つまりシャドウはここ以外にも居るつて事なのか？

「シャドウを集めたあ…つえつ…正氣かよつ。」

思考も気になるが手段も気になるところだ。

「しかし、10年前…計画の最終段階で暴走事故が起き、実験は失敗…制御を失ったシャドウの力で、後には忌まわしい痕跡が残ることになってしまった。」

「それって、まさか…」

「そう、影時間と、タルタロスだ。」

なるほど…あれの原因が桐条財閥か…それは話せないわけだ…普通に考えて企業の都合とかもあるだろ…むしろ話してくれたことが俺達が信用されていると言うことに感じる。

「記録では、集まっていたシャドウは分かれて飛び散り消失した

とある。満月の夜にやつてくるのはこのときのシャドウだ。

「消失…それでいつも、予想できない場所に…」

まあ…幾月さんはシャドウに関する知識があつたことだし…桐条で研究はしていったが。

「ちょっと良いですか？今の話がホントならなんで学校がタルタロスに？」

まさか…実験をやつた場所つて…！？」

「…そうだ。」

「じゃあ…ウチの生徒が何十人も入院したつていう、あれも…」

「全て、君の考へてゐる通りだ。傘下にあって、人が集まり、最も好きなように出来る場所…恐らくポートランドは最適だつたんだ。

実験の場所は、紛れも無く、10年前の月光館学園だ。」

「それ…どういうことですか…それじゃ、この部の活動つて…無関係の私たちを使って、そのときの後始末つてこと？」

たしかにそういう解釈も出来るよな…

「…騙したんですか？」

「…」

「真田先輩だつて知つてたんでしょう？…これじゃ私たち都合よく利用されてるだけじゃない！」

それとも先輩は、戦う理由なんて、どうでも良いって事なんですか？」

ゆかりさんはかなり熱くなつてゐるみたいだな…

「そんな風に言つた覚えはない！理由なら…あるわ…」

「どう取つてくれても良い…黙つていたのは、確かに私の意思だ。済まなかつた」

話すべきか隠すべきか、難しいところだと思つ、黙つていたことを怒るのもわからないでもないし…

「隠す気は無かつた…。だが筋道よりも、君らを確實に引き入れる事のほうが私には大切に思えた。理不尽だろ？と、戦えるのはペルソナ使いだけ…世界で私達だけだからだ。」

「今さら…！」

「それに私には…力を得るかどうか、選ぶ余地など無かつた。私は

…」

「美鶴…もういい。」

美鶴さんの言葉を真田さんが遮る…付き合いの長い一人だし、色々事情は知っているんだろうな。

「岳羽君…罪は過去の大人たちにある。そして彼らは、みんな自らの行いによつて命を落とした…今はもう、当事者は居ないんだ。謂れの無い後始末なのは、みんな同じなのさ。」

それはなあ…10年前…当時7・8歳の美鶴さんにはどうしようもないだらうし…そのときの幾円さんの立場は気になるが…

「でも…」

「事故から10年…シャドウ達がどうして今になつて目覚めたかは、本当に分からない。でも目覚めたつて事は、見つけて倒せるつて事でもある。これ、どういうことか分かるかい？」

…どういうことなんだ？

「あの12体こそ、全ての始まりなんだ。…と言つたら、分かるかな？」

「ヤツらを全部倒せば…影時間やタルタロスも消える…？」

なるほど…！

「その通り！さつとは話の腰を折られちゃつたけどどうだい、朗報だろ？」

「ゴールが見えたつてことだものな

「本当なんですか！？」

「確証となる記録もある。ここからが、本当の戦いの始まりだね。」

「ホントの、戦い…」

「事情がどうあれ、人を守るためなのは変わらない。シャドウ達はだんだん力を付けている。待つていいだけじゃ勝てない。」

「…はい」

「それにタルタロス自体にも謎は多いからね。」

まったくだ、いつたい何階まであるんだ…徒歩で登る高さには思えない…

「何故あんな巨大なものが現れたのか…僕らの知らない答えがきっとあるはずだ。」

シャドウに関しては色々分かつてきているがタルタロスに関してはまだ謎ばかりだな…

「答え…」

その後美鶴さんとゆかりさんは部屋に戻った。一人で考えたいようで宙さんが尋ねていつも無駄だったようだ。俺は順平さんが全て理解できていないようなので風花さんと一緒に話の整理に付き合っていた。

「でもよ、全て終わつたら俺達の力もなくなるんだろう?せっかく授かつたのに…」

「そう…かもしれません気がなつている点はあります。」

「なんだ?」

「シャドウを集めたつて話にありましたよね?つまりタルタロスや影時間は大量に集まつたシャドウの影響だらうから消えるんでしょうけど…シャドウという種が元より居たというならシャドウ全てが消滅するわけじゃないことだと思います。」

「あ…確かにそうだよね。集めたつて言つことはそもそもとかういたつて言つことだし。」

「お?つまりペルソナは消えないってこと?」

「…まあでも普通に生活しててシャドウと遭遇することなんてめつたに無いことかもしれません。日常では使えないことには変わりませんし…」

「でももしかしたら世に残るシャドウを倒して回る正義の戦士…とかもありえるってことだろ。」

「可能性は…ではないよね?」

「 もうですね……もうこうこともあるかもしませんよ。」

他のシャドウと遭遇する確立なんて〇に等しい。……けど〇ではないだろう。

まあ、こうこう不可思議な現象、普通は人生に一度のことだらうしな……

7月11日（後書き）

今回はほぼ原作どおりですがノーカットでお送りしました。
この話は4にも通じるところだと思つんですね。

それにただの説明話だけじゃなく人間関係も錯綜するシーン。 重要な
だと思いました。

順平が主人公に割と突っかかる時期でもありますが年下の鳴上相手
にあたるほど心の狭い子ではないと思うので普通に接しています。
ではここまで読んでいただきありがとうございました。

一夜明けて12日、日曜日。

テスト前と言つても念めかもしれないけどなかなか寮内でみんなと会わない…

順平さんと真田さんは外出しているみたいだし… ゆかりさんと美鶴さんは下に顔を出さない。

俺としてはせつかくの上級生との寮生活… 勉強教えてもらわればなあと思ってロビーにいたのだが… この寮には学年トップの美鶴さんと苗さんが居る… そしてやつて居ると風花さんは下りてきた。

「鳴上君だけ？」

普段はわりと暇持て余している人達が居るからな…

「ええ、勉強教えてもらおう」と居たんですけどね。誰も来なくて。」

「なら私が教えてあげようか？」

「お願いします。」

風花さんも成績は上位らしいしありがたい。

「やつぱり昨日の話…みんな考えると…あるんでしょ？」「休憩に入り俺がコーヒーを入れつつ話を振る。

「テスト前だからって思いたいけど…」

うん…でもこの寮の雰囲気が重い…から先に影響でそうだし

なあ…

「二人とも勉強？大変だねー」

話していると宙さんが降りてきた。

「時価ネット見てたら昼過ぎになっちゃったよー。」

いつもとペース変わらない様に見えるな…

「宙さんはどこかに出かけるんですか？」

「ん~日曜日はあまりすること無いんだよねー、なんなら私も一緒に勉強するかな」

「うん、一緒にやろうか。」

結局3人で勉強することにした。

「で、さつき一人が話してたことだけどさ。」

聞いてたのか…

「とりあえずみんな少し自分で整理する時間が必要じゃないかな…幸いタルタロス探索はそこまで問題でないよ。そっちのパーティーのフォローは鳴上君に期待してるよ。」

たしかにゆかりさんと美鶴さんの別行動はありがたい気もする、一
緒だと気詰まりしそうだ…

「風花には両方見てもらわないといけないから大変だけね。」

「う、うん、でも順平君は…」

「大丈夫だつて、それにもうすぐ夏休みでしょ。パートと気晴らし
でもすればなんとなるよ。」

「その前に期末テストだけね…」

テストは気が重いが試験休みもあるし…そこらでみんなの息抜きで
も出来れば状況はよくなるかな…しかし流石にリーダーだな、気に
かけないようでみんなを見ているようだ。

その日はじっくり勉強を教えてもらつた…成績上位と成績トップに
教えてもらつと学力はかなり伸びたような気がする。

7月1-2日（後書き）

期末テストイベント前のインター「ラジコン」のようなものです。
ちょっと忙しいので短めで内容もあまり無いですが…
ではここまで読んでくださつてありがとうございました。

明日からテスト…寮生はみんなリビングに集まっているが会話が無い…

「どうした、みんな。腹でも減っているのか?」

「い、いえ。」

真田さんだけは何故こんな状況なのか良くわかつてないようだ。

「ええと… も、おつすぐ夏休みですね。皆さん、何しようとか、考えていますか?」

風花さんは話題を振るうとしている。昨日の余話もあるし乗るうと思つたが順平さんが先に乗る。

「そらまあ、夏と言えば海でしょう。ビーチに、水着に、ひと夏の思い出。ああーっ、気晴らしにどうか海とか行きてしまつ。」

「うううとき順平さんの載りは空気を和らげるよな。」

「あ、良いですね、海、海釣りも楽しいですし。」

俺も会話に乗る。

「お前そういうのないだろ、女子と一緒になんかいり、南のほうのメチャクチャ透き通つてるとこりでバカンスだろ。…つか、明日から期末だけどよ…あー、マジだりいー」

「まあまあ」

空気は少し軽くなつたな

「けど、きれいな海つて言つて沖縄とか、一度行つてみたいな。」

良いなあ、沖縄、俺一度も行つてことないし

「沖縄じゃあないけど屋久島つて選択肢ならアリかもね。」

幾月さんどこから聞いていたんだ?

理事長：いらしてたんですか。

「いや、前を通りかかつたんで、来週の予定をちょっと知らせにね。

木元春 お父さん

「試験が明ければ、君らは休みだろ？…どうだい、一ひとで気分転換

三九

「マジッ!? それ旅行つて一泊スよね!!?

井夕ノニシテ、海ノ天晴ニシテ、鷦^{シラサギ}ノシテ、

だぞ、
海だぞ
「

「順平、あんたの趣味に鳴上君を巻き込むんじゃないわよ…」

いや 俺も嬉しいで さあ 旅行がんばりで さう

ପାଞ୍ଚମୀ ଶତାବ୍ଦୀ ମଧ୍ୟରେ ହେଉଥିଲା ଏହାର ପରିବର୍ତ୍ତନ ।

「どうだい、桐条君。」

あらたにま
-

美鶴さんはあま

「ハハ、珍しく氣弱じやないか。ご息女が顔を見せに来るのにお父

ノルマニカノミコト

がんばれ幾月さん、こういうときの説得以外役に立たないんだから……君らは本当によくやつてる。たまには息抜きも必要だよ。次の作

戦田もわかっているわけだし……私は良いと思うけどね。」「

「私も屋久島へきたーーー！」

宙さんも説得に乗り出す。

「センハイ! お願いします!」

「翻譯」二字，是「翻譯」的翻譯。

「俺も行きたいですよ。世間かくの休暇なんですし。」

息抜きとか仲間内の関係の建て直しとかを抜いても遊びたいし
「……分かった。気分転換は必須事項のようだ行こうじゃないか。

「

よし！

「オッシャーーー！」

俺と順平さんはハイタッチをする。

「海か…特別メニューが組めそうだな」

「真田さん…息抜きで遊びに行くんですよ…」

この人の頭にはそれしかないのか…

それから俺達は屋久島旅行について盛り上がった。

美鶴さんは途中で部屋に戻ったようだが…そしてそれを追うゆかりさん姿も見えた…

良い傾向に思えるな…そつとしておこづ。

まあ…それはそれとしてその前に期末試験という関門があるわけだ…

7月13日（後書き）

テスト休みとか存在 자체が「うらやましいですね。
私が高校生の頃はそんなもの無かつたですよ。

でもここで問題浮上：これを書くにあたって女性主人公では進めて
いますが屋久島磯釣り大作戦に番長が参加するのに参考にするキタ
ローでのデータは無いんですね。

まあ、正直筆者的には中学生が社会人ナンパとかはどうかと思うの
で参加させない方向で話を作るかもしれません。

ではここまで読んでくださつてありがとうございました。

7月1-8日（前書き）

今回超短いです…

よつやくテストも終わった。

テスト終了後だし遊びに行かないかと言つひで順平さんに連絡を受け俺も高校のほうに呼び出された。

俺が着いたとき宙さん、ゆかりさん、真田さん、順平さん、幾月さん、そして知らない少年が居た。

俺が合流したときに話を聞いたところ彼は天田乾…初等科の子らしきが家庭の事情で夏休みの間も実家に帰つたりしないらしい。

そのため夏休みの間俺達の寮にいるといふことらしい。

当然、来るからにはペルソナの素質はあるらしきが…

「俺も中等科だけど寮に入つて、よろしく」

戦つか、戦わないか…そこは分からぬが、俺以外にも高等科ではない子が入るのは歓迎だ。

小学生が戦うのは俺もゆかりさん同様反対だけどな。

天田君と別れた後てつきり屋久島旅行の準備のために集まつたかと思つたがそうでもないようだ…

風花さんも用事で居なくなつたらしいし…

しかし…みんなして直前…つまり明日まで準備しないつもりなのか?

決まつたのがテスト前日だつたから俺も準備してないけど…

でも見たところ宙さんと順平さんのわだかまりも解消されたよう見える。

俺はとりあえず旅行に必要なものをピックアップしておいたので先に買い物することにした。

当然ガイドブックもだ。

泳ぐのも良いけど名所を見てまわりたいし…

7月18日（後書き）

短くてすみません。

天田君登場ですが高校前なので最初から鳴上がいるのも不自然といふことで思いつきりカットされてしまいました。

最近ちょっと忙しくてペースが落ちてしまいます。

ではここまで読んでいただきありがとうございました。

いよいよ屋久島行きだ。俺はガイドブックも買い込んでいる。

縄文杉とかも見学行きたいな、でも初日はみんなと一緒に海水浴だらう。

「おー、ようやく見えてきた、すげー・ヤ・ク・シ・マーー」

順平さんが歓声を上げるのも分かる、きれいな島だ。

風花さんも盛り上げようとしてる……が

ゆかりさんと美鶴さんはまだ引きずつてるな……空気が重い……

俺も観光ガイドを買ったとか言つて盛り上げようとするが……この雰囲気は変わらない……そのまま屋久島に到着した。

そして案内されたのが美鶴さんの別荘…リアルメイドと言つのを初めて見た…今の日本メイド服だけなら普通に見ることもあるんだけど…

その中にいる眼帯を付けた人…うわ…迫力あるな…あれば美鶴さんの父親なのか…あまり似てないな、母親似なのかな…まあ、それはともかくせつかくの休暇、俺たちは海に行くことにした。

当然準備は女性のほうがかかる。俺たち男たちは先に行くことになつた。

さて…女性達が着替えるのを待つ間順平さんが話しかけてくる。

「鳴上、ついてだから聞くけどお前の好みって誰?」

難しい質問だ。俺的には全員美人で全員OKと思つたが… そう答えると…

「お前つてけつこいつ女たらしなの？ 真田さんばジバシスか？」

「好み？ 良くわからんな…」

「この人に聞いた俺が間違つてたよ…」

確かに…この人もてるのに天然だからな…

そう話してゐる間に女性陣がやつてくる。

全員美人だし…スタイルも良いし、これだけでも来た甲斐はあると思つ。

順平さんのように親父丸出しでは逆に引かれるといつもの。

「いや、畠さん水着よく似合つてますよ」

とりあえず褒めておく…これが大事と思つ。

「お前これでも全員か？ 誰かをつて思わないのか？」

「逆に選ぶのが難しいですよ。」

「まあ、その気持ちはわかる、真田さんは？」

真田さんは赤くなつてゐ、一応女子に興味はあつたんだな。

「よーし、それじゃあ、水に浸かろうぜ。」

真田さんと美鶴さんはのんびり過ごしてゐる。てつくり真田さんは黙々と泳ぐタイプと思つていたんだけどな。
畠さんは泳ぎを楽しんでゐる。

途中で

「うーん、なんか見られてるよつた気配するなあ…」

「水着姿注目されてるんじゃないですか？」

「そういうのじゃないと思つんだよね…ま、眞にしても仕方ないか。」

「… といつ会話もあつたが。

そして順平さんがゆかりさんと風花さんに水をかけてくる。

「鳴上君、加勢して、この調子に乗つてゐるのを倒すの手伝つて。」

「鳴上一、男ならこっちに加勢するよな？」

すみません、順平さん、こうなると俺は女の子の味方します。

3対1で順平さんを攻撃して楽しんだ。

散々遊びまわつて夜、俺達は応接室に集められた。

美鶴さんのお父さんに招かれた。シャドウに関するとかな？

「美鶴から、大体は聞いているな」

「あ、はい」

ゆかりさんが答え俺たちも頷く。

「左様、全ては大人の…我々の罪だ。私の命一つであがなえるのなら、とうにそうしていたところだが…今や、君らを頼る他はない。父鴻悦が怪物の力を利用してまで造り出そうとしたもの…それは時を操る神器だ。」

時を操るか…そんな奇妙な冒険のボスキャラが使う能力のものを生み出そうと…

「時を操る…？」

「言葉の通りさ…時の流れを操作し、障害も、例外も、全てを起ころ前に除ける。未来を意のままにする道具と言つても良い」過去ではなく未来を操作すると言つことか。

「す、すげえ…野望のサイズがデカい…」

「だが研究は、父の指示によっておかしな方向へ進んで行った。…晩年の父は、なにかとも深い虚無感を胸の奥に持つっていたようだ。今にして思えば、父の乱心は、それを打ち破るために始まったのかも知れん。」

君らがすべてを知りたいと望むのは当然のことだ。私にも伝える義務がある。」

やはりこの人が直接研究に関わっていたわけじゃないっぽいな…多少は知っていたのかも知れないが深くは知らないようだ…なら責任を感じる必要はないと思うんだが…

そんなことを考えていると室内の大型モニターに映像が映し出される。

「これは……？」

「現場に居た、科学者によつて残された、事故の様子を伝える唯一の映像だ。」

「……映像？」

事故現場の映像か

『この記録が……心ある人の目に触れる事を……願います。』

「……」

ゆかりさんには聞き覚えがあるのか？

『ご当主は忌まわしい思想に魅入られ、変わってしまった。この実験は……行われるべきじゃなかつた！もつ未曾有の被害が残るのは避けられないだろ？』

でも、こうしなければ世界の全てが破滅したかも知れない！』

「世界の……破滅？」

『この記録を、見ている者よ、誰でも良い、よく聞いて欲しい！！！集めたシャドウは大半が爆発と共に近隣へ飛び散つた。悪夢を終わらせるには、それらを全て消し去るしかない。』

……シャドウを消すのが解決策ではあるのか

『全て……僕の責任だ。全てを知つていたのに、成功に目が眩み、結局は御当主に従う道を選んでしまつた……』

……？……なんか不自然に感じるな

『全て、僕の……責任だ……』

「……？」

顔が映し出されてゆかりさんがお驚くのが視界に移る。

それで映像が終わる……うへん……腑に落ちない……

「お父さん……」

……あれはゆかりさんの父親だつたのか

「お父さんつて……今の人……？」

「……」

「お父様、これは…」

「彼は岳羽詠一郎…当時の主任研究員だ。実に有能な人物だった。その彼を見出して利用し、こんな事件まで追いやってしまったのは、我々グループだ。詠一郎は…桐条に取り殺されたのも同然だ。」

「ま、まさか…」

「つまり…私のお父さんが、やつたつて事…？影時間も…タルタロスも…たくさん的人が犠牲になったのも…みんな…父さんのせいって事…？」

「お…おい…」

「じゃ…色々、隠してたのって…ホントはこれが理由？私に気遣つて、隠してたってこと？そういうことなの…？…？」

「岳羽、それは違う、私は…」

「かわいそうとかやめてよ…」

口論をしてゆかりさんは走り去る…が、俺はさつきの内容の違和感を考えていた…やはり不自然に感じるな…
そうしてゐ間にゆかりさんを追いかけたほうが良いといふ話しが出る。

「鳴上君、行つて来て。」

え？俺？

「何か気付いたんじゃないの？まあ、そりゃないにしろコーダー命令、行つて慰めてきなさい。」

確かに気休めにはなるかもしれないけど…俺のは違和感を感じただけだ…でも確かに、検証より日の前のことだよな、俺は追いかけることにした。

「ゆかりさん」

砂浜に立つてゐるゆかりさんに声を掛けてみる。

「鳴上君…さつきの映像で見たのが私のお父さん…10年前の事故で死んで…研究主任だった父さんが世間の目の敵にされて…色々な

場所を転々と引っ越したの……」

「なんて声をかけて良いものか……」

「そうだったんですか……」

「でも私、ずっと信じてた。父さんは悪くないはずだって。小さい頃から大好きだったし、絶対悪い事するような人じやないって。実は、春頃ね、手紙が届いたの。10年前の父さんから、家族へつて。笑っちゃった。殆ど私のことしか書いてないんだもん……だから信じようつて思つてたのに……だから、自分に力があるつてわかつたときは、偶然じやないつて思つた。怖かつたけど、桐条グループの傍にいれば、父さんの事……何かわかるかもつて。だからペルソナ使いになつて戦いも続けてきた。でもさ……なんて言うか……そんなの無駄だつたんだね……」

それがゆかりさんの戦う理由か……

「無駄だつたとかそんなことはないと思います。」

「フフ、氣休めだよそれ。ハハ、現実つてキツいよね……怖いの我慢して戦つてるのに、どうにもなんないよね、これじや……」
これは俺が感じた違和感を話してぶつかつてみるか……けつこう賭けだよな、自分でも整理しきれてないのに

「無駄ではないといふのは確かに氣休めかもしません……でもまだ俺はさつきのが全てだとは思えないんです。」

「どういうこと……？」

「さつきの映像の発言、違和感を感じたんです……」

「違和感?どこに?」

「動機です……『成功に目が眩み、御当主に従つた』」

「それのどこが?」

「成功に目が眩む、つまり成功して得るものがある場合のことです。この場合成功して得るものは何か、そう考えてみたんです。まず第一に成功して手に入る地位、名声が思いつきます。」
話しながらも自分の考えを整理する。

「でも全てを知つていたのならこれはおかしいです、最初の目標、

『時を操る』ならともかく『世界の破滅』という言葉から考へるに成功してもそんなものは得られません。』

それでも『世界の破滅』の規模が分からぬ以上もしかしたら何か得るものがあるのかも知れない……

「何が起ころか知らなかつたということは、本人の『全てを知つた上で』という言葉で否定されています。」

「……つまりどうしたこと?」

「俺の言つたことは関係ないかも知れない。でももしかしたら何か事情があるのかも知れないってことです。まだ信じられないって決め付けるのは早い……そういうことです。」

映像という物的証拠に比べたら些細な違和感だ……だが発言時に話している映像があつた訳ではない。言葉を残すなら最後にチラッとだけ顔を見せるつて言うのも不自然に思える……推論だけだから一時しおぎの気休めかも知れないけど……

「お父さんを信じ続けてみましょ」

「……」ごめんね、年下の君にそこまで言われて落ち込み続けるわけにいかないし……ありがとう、私は大丈夫。』

目は赤くなつてゐるがそれでも笑顔は取り戻せたようだ……上手く行つて俺も一安心かな……

「うおおーい！」

順平さんの声が聞こえる。

「ハア、まったく、遅いよオマエら……」

と話してゐる途中でどこからともなく宙さんが出て来て順平さんを殴る。

「空氣読めーーー！」

「グハツ……いつてえ、宙、なにすんだよー！」

「良い雰囲気作つてるとこに出て行くもんじやないのー空氣読みなさいー！」

この人隠れてどこかから見てたのか……もしかして……

「ハア……まあ、仕方ないか、もうすぐ影時間だから戻るよ、二人と

も。
」

空氣も完全に緩んだな…俺達は戻ることにした。

7月20日（後書き）

屋久島編一日目です。

ここでは慰める役目を鳴上が貰いました。

といつても境遇的に両親健在の彼ですから推理という名目で違和感をぶつけて慰めもらうことになりました。

ちなみに順平への空氣読めという突っ込みは初回プレイ時（PSP版）でキタローでやつてたときの筆者の叫びでもありました。ではここまで読んでくださつてありがとうございました。

7月21日

S H D E 鳴上 悠

「それじゃあ順平さん達は今日も海ですか？」

俺は真田さん、順平さんと今日の予定について話していた。

「お前、フツーは海があれば泳ぐだろ？ 杉を見に行きたいなんてジジくせーって。」

ガイドブックを見て観光に行きたいといつ俺に對して順平さんは不満があるよつだ。

「俺も観光より海で特訓だな。泳ぐのも良いし砂浜は足腰を鍛えるのには良いんだ。」

真田さんも海に行くみたいだし…

「なら女性陣にも伝えておいてください。」

「おひ、お前がそっち行つてる間俺たちは女子と遊んでるからよ、後で悔しがるなよ。」

水着は昨日楽しませてもらつたし、まだ機会はあるかもしれないしな。

せっかくの屋久島俺は観光を楽しもう。

S H D E 伊織順平+真田明彦

「つて行つて来たのになんで女子がいねーんだよー。」

「山岸の書置きによると女子だけで縄文杉に行くと…」

「なんでだよー！鳴上といい女子たちと言ひ南の島来たら海に行くものだろ、フツーー！」

SIDE 有里 宙

私達は風花の提案で女子だけで縄文杉の観光に向かつていた。

鳴上君の持つてきた観光ブックを見て気になつてはいたんだけどね。それよりゆかりと美鶴先輩の気分転換が目的だらうな…といつても二人とも上の空だけど…

そんなとき美鶴先輩の携帯に連絡が入る…幾月さんからみたいでスピーカーホンに切り替えて私たちにも聞こえるようにする。

「今、島の研究所に居るんだが…」

屋久島にまで研究所あるんだ。しかしこんなところまで仕事持ち込まなくて良いと思うのになあ。

「廃棄されて、動かないはずだつた機械が、勝手に出て行つてしまつたんだ。」

「機械？」

「ええと…どういつた物なんですか？シャドウ以外だと、勝手が違うもので…」

確かに、シャドウ関係ならともかくペルソナを抜かせば私達は普通

の女子高生だし…

「戦闘車両の一種でね… 実は対シャドウ兵器なんだよ。」

シャドウ絡みだったみたい… って言うか実験の失敗と良い桐条の研究は暴走する宿命でも背負つてゐるんだろうか…

「対シャドウ兵器… つて要するに戦車つてコト！？」

戦車… 暴走車両がこの辺荒らしたらかなり問題ない？ 屋久島の自然を破壊つていくら桐条でも問題でしょ。

「ちょ、みんなに連絡しなきゃ！ えっと、ケー・タイ…」

しかし携帯は鳴上君以外通じないみたい… 鳴上君は別行動らしく、順平と真田先輩には連絡付かないか… といつても鳴上君はかなり遠いみたい。私達は装備をとつてから鳴上君と合流することにした。装備さえあれば風花の探索能力の出番だしね。

SIDE 鳴上 悠

俺は一人で縄文杉の観光に来ていた。

朝早くに出発しておいたおかげですでに到着していたんだが… これからじつくり見ようと思ったところでタイミング悪く電話が入る。なんでも対シャドウ兵器の戦車が勝手に動き出したらしい。せっかくの休暇なのに物騒な事件だな… とりあえず仲間と合流しなくてはいけないな。順平さんと真田さんには電話が通じないらしい。俺は先にそちらに連絡するために海を目指す顔を伝え海岸に向かって歩き出した。

俺は海に向かつて歩いていたが途中でワンドースを着たすごい美少女がこちらに向かつてきてるのを見た。

「すみません、人を探しているんですけど…」

一応順平さん達を見なかつたか尋ねてみることにした。

「あなたではありません。」

「は？」

それだけ言つて彼女は立ち去る…なんだつたんだ？
次に彼女の来た方向から順平さんと真田さんが走つてくる…森で水着はけつこう危ないと思つんだけど…

「お、鳴上、ここにすごい可愛い子来なかつたか？」

わづきの子のことだろ？

……つて考えてみたら今対シャドウ兵器の戦車が動いてるんだつた。
彼女も危ないかもしねり。

俺は追いかけながら状況を説明し、ついでに順平さん達が追いかけている理由も聞いてみた。

なんでもナンパしたら走り去つたらし。自分たちが何か悪いことしたんじやないかつて事で追いかけているらしい。

結局繩文杉まで戻つてしまつた。

「いたいた…つて、ふえつ！？何その展開！？」

順平さんが驚いて当然だろう、謎の美少女が宙やんに抱きついているんだから…

「なるほど、わづきが好みといつことか。それならわづきの態度は頷けるな。」

ナンパ失敗の言い訳にも聞こえるが…

「やあつと見つけた、宙…」

ゆかりさんたちもやつてくる。逸れていたのかな？

「あ、鳴上君、順平と真田さんを連れてきてくれたんだ。」

「と詫うか…皆さん、なんで水着で？」

「まったく、こっちは大変だつてのに…ってあれ？ 宙、なんで抱きつかれてるの？」

「さあ、私が大切なんだって」

「…ええ？」

状況が混乱してきたな。そこに美鶴さんもやつてくる。

「ここに居たか、装備は持つてきた、準備をしてくれ。」

「いや…準備は良いよ。探し物は見つかったからね。」

「幾月さんも来た…って探し物が見つかったって？」

「理事長…どういうことですか？」

理事長はゆかりさんの疑問に答えず謎の美少女に話しかける。

「やれやれ…探したよ。勝手に出たら駄目だろ、アイギス？」

「…はい」

「どういうことだ…？」

夜、俺達は桐条家の別荘に戻った。

「いやはや、心配かけて済まなかつたね。もう大丈夫だ。」

「あの…戦車を追うとか言う作戦はどうなつたんですか？」

「あ、それもう完了だから。」

風花さんの質問に答えるがやはりわけが分からぬ…

「アイギス、こっちへ来なさい。」

「はい。」

先ほどの美少女だな。

「彼女の名はアイギス。見ての通り機械の乙女だ。」

「初めてまして、アイギスです。シャドウ掃討を目的に活動中です。

今日付けて、皆さんと共に活動するあります。」

「ロボット！？ 嘘だろ、人間に見える。」

「うそ…まるで、生きてるみたい…」

「信じられん…」

「こんなにカワイイのに、ロボって…なにこのトホホ…」

「世の中にはロボが良いつて人もいると思う。」

「10年前、シャドウが暴走した時の保険としてシャドウ兵器というのが計画されてね。アイギスはその中でも最後に作られた一体…そして唯一の生き残りなんだ。」

「対シャドウ兵器…ということはまさかペルソナを…?」

「はい、ペルソナ呼称『パラディオン』を扱える仕様であります。」

「彼女は、10年前の実戦で大怪我を負つて、こここの研究所に管理されていたんだ。なぜ今朝になつて急に再起動したのか、いまいち、ハツキリしないんだけどね…まあ、これから仲良くやってくれ。」

「精神が備わった、対シャドウ兵器…すごい、すごいです。」

「心のあるロボットか…女性型なのは製作者の趣味だろうな。」

「あ、そう言えばさつき、抱きついてたよね…宙に。知り合いで…てワケ無いか」

「はい、わたしにとつて、彼女の傍にいることはとても大切であります。」

「フム、人物認識が完全じゃないのかもね。」

「流石に専門的なことだと分からぬが…人物認識は出来るようになる。」

「あ、それとも寝ぼけてるつて事かな?んー、そいつは興味深いぞ」

「精神があるなら寝ぼけてるつて事はあるのかも」

「そういう話をしながら夜はふけて行つた…その後理事長のカラオケに付き合わされたが…」

…

7月21日（後書き）

屋久島旅行二日目です。

ついにメインヒロインと呼ばれることが多いアイギスの登場です。
しかしアイギスは3主以外にとつては攻略難易度は高そうですね。
番長によるアイギス攻略を期待している方もいらっしゃるかもしれません
がアイギスとの関係に関しては筆者のほうでもまだ先が見え
ていらない状態ですね。

ではここまで読んでくださつてありがとうございました。

SIDE 鳴上 悠

明日には帰るので遊ぶのは今日が最後。

今日は俺たちに加えてアイギスも海に来ていた。

順平さんは3日じゃ短いなあと言っているが今日はまだあるわけだし、最初の一日はやたらと濃密だった気がするし。

それにまさか休暇で新たな仲間が加わるとは思っていなかつたし…真田さんは昨日のカラオケでの理事長の歌と順平さんの歌でダメージを受けて寝不足らしい。あの特訓好きの人ぐつたりと体を休めている。

アイギスは娯楽というものを言葉としては理解しているようだけど実感がないみたいだな。

とりあえず今日はみんなで遊ぶことにしよう。

ちゃんと防水機能もあるみたいだからアイギスも海に入れるみたいだし、今のところ感情が希薄みたいだけビペルソナが使えるんだし、感情がないというわけではないだろう。

途中でスーツを着て幾月さんが通りかかったが…暑くないんだろうか…

今日は最終日、旅行も終わりようやく寮に帰ってきた。
流石に屋久島は遠いな…帰つてきたら夜遅い時間だ。
明日も学校はあるけどすぐに夏休みだ。

と言つても満月まであと二週間、遊んだ分はタルタロスでの特訓がんばらないと。

24日、テスト休みも明けて今日も学校だ。

俺は気合を入れなおすために朝食をしつかり作りついでに朝練が早めの時間から起きていた。

そこに部活の朝練があるといつゆかりさんが来た。

「鳴上君、アイギス見なかつた？なんかいないうらしいんだよね。」

アイギスが？

「そなんですか？でも少し前に注意したのにまた黙つてどこか行くとか考えづらいですね。」

「田のところにでも行つてゐるのかな？ちょっと行つてみる。」

「あ、俺も行きます。」

女性の部屋に朝から訪ねるのはマナー違反かもしれないけど……声をかけるだけにして部屋に入らないようにすれば良いだらう。

「『メン、ねえ、起きてる？』

ゆかりさんがノックする。

「実はあの子がどこを探しても居なくて、ちょっと手伝つて欲しいんだけど。」

「もしかして田さんのところに来てません？」

ゆかりさんにして声をかける。

「私の名前はアノコではありません。アイギスならここにおります。」

「本当にいたし……」

「え……？」

ゆかりさんがそのまま戸を開ける……鍵かかっていないし……

「アイギス！？あなた、いつの間に…」

「この方は就寝中でした。ドアの開錠には2分かかりました。」

「ピッキングの技能まで持っていたのか…それを仲間の部屋に使うのがずれているが…」

「モロ不法侵入じゃん！夜は作戦室に居てつていったでしょ！？」

「今後、わたしの居場所は、ここが良いかと思いますが、何か？」

「な、唐突に何言つてるのよ。」

「問題点があれば速やかに対処します。」

「あー…まあ、女の子同士だし…当人が良いなら良いかもだけど…でもベットは一つしかないし…狭そうだな…」

「…部屋すつこい狭くなると思うよ？良いの？」

「別に良いよ～、アイギスなら歓迎～」

まだ寝ぼけてるのかそんな声を出す。

「ゆかりでも同室おつけー、美鶴先輩や風化もかんげ～

「いや、聞いてないし！」

寝ぼけてる…

「鳴上君もありかな～、順平は部屋汚しそうだし駄目…真田先輩も暑苦しそうだからいや～」

寝ぼけながらも順平さんや真田さんの評価は正しいと言わざるを得ない…順平さんの部屋一度美鶴さんに泥棒に荒らされたと勘違いされるほど乱雑だし…真田さんは部屋にトレーニング器具持ち込んでるし…なんで俺は許可されるのかは謎…

「まあ…私達は別として…今日からここがアイギスの部屋ね。」

「早速、装備品を運び入れるであります。田さん、予備弾装類は床においていいですか？」

「床は踏むから棚に入れておいて～」

「ちょ、弾装は駄目だつて！？」

「ですが、私はこの方の傍に…」

「しょうがないな…じゃ、3階に部屋を用意してもうつからそっち

行つてよね。」

なんだかんだ言って面倒見いいよな、受かりさん…

朝からそんな騒ぎがあつたが結局アイギスの部屋を用意することで落ち着いた…

ちなみに朝食のとき宙さんはアイギスが来たことは把握してたが会話は殆ど覚えていなかつた…

人間意外な面があるものだ…

7月22日～24日（後書き）

屋久島編終了です。

重要イベントは前回で終わってはいたんですけどね。
ではここまで読んでくださつてありがとうございました。

今月はちょっと忙しいので更新が3日に一度程度になるかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8553x/>

P3P + 番長

2011年12月1日19時49分発行